

河内地域における弥生前期の 炭素14年代測定研究

¹⁴C Dating of Yayoi Period in Kawachi Districts

小林謙一・春成秀爾・坂本 稔・秋山浩三

KOBAYASHI Ken'ichi, HARUNARI Hideji, SAKAMOTO Minoru
and AKIYAMA Kozo

はじめに

①河内地域の弥生前期・中期の土器付着物年代測定遺跡と資料

②近畿地方における弥生時代前半期の実年代

③近畿における弥生化の実像解明に向けて

④まとめと課題

【論文要旨】

近畿地方における弥生文化開始期の年代を考える上で、河内地域の弥生前期・中期遺跡群の年代を明らかにする必要性は高い。国立歴史民俗博物館を中心とした年代測定グループでは、大阪府文化財センターおよび東大阪市立埋蔵文化財センターの協力を得て、河内湖（潟）東・南部の遺跡群に関する炭素14年代測定研究を重ねてきた。

東大阪市鬼塚遺跡の縄文晩期初めと推定される浅鉢例は前13世紀～11世紀、宮ノ下遺跡の船橋式の可能性がある深鉢例は前800年頃、水走遺跡の2例と宮ノ下遺跡例の長原式土器は前800～550年頃までに較正年代があたる。奈良県唐古・鍵遺跡の長原式または直後例は、いわゆる「2400年問題」の中にあるので絞りにくい、前550年より新しい。

弥生前期については、大阪府八尾市木の本遺跡のⅠ期古～中段階の土器2例、東大阪市瓜生堂遺跡（北東部地域）のⅠ期中段階の土器はすべて「2400年問題」の後半、即ち前550～400年の間に含まれる可能性がある。唐古・鍵遺跡の大和Ⅰ期の土器も同様の年代幅に含まれる。東大阪市水走遺跡および若江北遺跡のⅠ期古～中段階とされる甕の例のみが、「2400年問題」の前半、すなわち前550年よりも古い可能性を示している。

河内地域の縄文晩期～弥生前・中期の実年代を暫定的に整理すると、以下の通りとなる。

縄文晩期（滋賀里Ⅱ式～口酒井式・長原式の一部） 前13世紀～前8または前7世紀

弥生前期（河内Ⅰ期）前8～前7世紀（前600年代後半か）～前4世紀（前380～前350年頃）

弥生中期（河内Ⅱ～Ⅳ期）前4世紀（前380～前350年頃）～紀元前後頃

すなわち、瀬戸内中部から河内地域における弥生前期の始まりは、前750年よりは新しく前550年よりは古い年代の中に求められ、河内地域は前650～前600年頃に若江北遺跡の最古段階の居住関係遺構や水走遺跡の遠賀川系土器が出現すると考えられ、讃良郡条里遺跡の遠賀川系土器はそれよりもやや古いとすれば前7世紀中頃までの可能性が考えられよう。

縄文晩期土器とされる長原式・水走式土器は前8世紀から前5世紀にかけて存続していた可能性があり、河内地域では少なくとも弥生前期中頃までは長原式・水走式土器が弥生前期土器に共存していた可能性が高い。

はじめに

近畿における弥生時代の実年代については、光谷拓実によって大阪府池上曽根遺跡（池上＝曽根遺跡、本稿では国史跡名称の記載に従い池上曽根遺跡と記す）、滋賀県下之郷遺跡、兵庫県武庫庄遺跡などにおいて、年輪年代測定結果が示され、大きな議論を呼んできた。年輪年代では、近畿のⅠ期新段階が前448年以降（大阪府東奈良遺跡）、前445年以降、Ⅲ期が前245年（兵庫県武庫庄遺跡、ただし建物内中央の東柱掘方出土土器はⅣ期に相当し、柱穴の帰属等検討を要し時期については必ずしも明確ではない）、Ⅳ期が前97年・前60年（滋賀県二ノ畦・横枕遺跡、前60年については歴博でも炭素¹⁴年代〔以下、¹⁴C年代〕測定しウイグルマッチングの結果ほぼ一致）、前52年（大阪府池上曽根遺跡、¹⁴C年代測定しウイグルマッチングの結果ほぼ一致）というデータがある。以上のうち、¹⁴C年代を測定した例では、池上曽根遺跡の同じ柱根が前80～前40年であったほか、滋賀県下之郷遺跡の前271年の年輪年代をもつ木材（盾）が前285～前250年であった。しかしながら年輪年代が想定できる資料は限られる上、共伴土器との関係が不明瞭な場合や樹皮が残る例は少ないために辺材部分の失われている年輪数をどの程度見込むかなど万能ではない。¹⁴C年代法は、その時期の炭化物さえあれば測定可能であるから、考古学的な推定を検証するにとどまらず、独自に年代観を示すことができるという点で年輪年代法とともにきわめて優れた方法である。また、土器付着炭化物を測定することで、その土器の使用時期を明らかにすることが期待できる。

国立歴史民俗博物館に所属する私たち年代測定研究グループは、2004年度から5年間の予定で文部科学省科学研究費補助金・学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア―炭素年代測定による高精度編年体系の構築―」（研究代表 西本豊弘）を他研究機関の研究者とともに立ちあげ、縄文・弥生時代の高精度年代体系の構築の作業を引きつづき行っている。

その中でも、河内地域については、大阪府文化財センターと東大阪市立埋蔵文化財センターの協力を得て、縄文（本稿では縄文と表記する）後期から古墳前期までの約250点の土器付着物を採取し、そのうちから現在までに縄文晩期・弥生前・中期に比定されている資料として13遺跡から62資料79測定（うち土器付着炭化物53、漆1、木材8資料、木材の2資料は年輪試料を複数測定、土器付着物1は内外を測定。縄文後期および弥生後期以降も数十点の測定例があるが本稿では除外）の年代測定結果を得た。瓜生堂遺跡、上の山遺跡、私部南遺跡、池島・福万寺遺跡については、報告書刊行時にレポートを掲載したが、その他の測定結果について報告書がすでに刊行されていることもあって、レポートとしては未報告である。この場において、報告の責を果たすとともに、測定結果を統合し、弥生文化への移行過程を復元するための大きな手がかりとしたい。

本稿で主に対象とする河内地域の遺跡群のほか、大阪府内では和泉市・泉大津市の池上曽根遺跡や、茨木市牟礼遺跡、高槻市安満遺跡などで縄文後期～弥生中期の年代測定を試みている。それらについては別に機会をもつこととして、本稿では河内湖と呼ばれる湖の東部～南部に面した弥生遺跡群を対象に、弥生時代前期・中期の年代を整理し、長原式と弥生前期土器との年代的関係を見ることを目的としたい。同様に、近畿地方では、河内地域以外でも、奈良県唐古・鍵遺跡〔小林ほか2006a〕、兵庫県本山遺跡、滋賀県竜ヶ崎A遺跡、下之郷遺跡など、多くの遺跡で年代測定を重ね

ており、それらの結果とも統合させて考えていく必要があるが、今回は周辺地域については詳述を避け、測定した結果のみを用いることにしたい。

以下のうち、大阪府文化財センター所蔵資料の出土遺跡及び資料の説明と時期設定は主として秋山浩三〔秋山・三好・市村 2005 参照〕によるが、その他の遺跡については小林が秋山の考えに従って位置づけた。年代測定結果については、国立歴史民俗博物館年代測定研究グループが進めている科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築―」（研究代表 西本豊弘）で測定した結果について、今村峯雄の方法に準拠しつつ小林が坂本稔と検討し、IntCal04 を用いて較正年代を計算した。年代測定から導かれる近畿地方の弥生文化移行期の歴史的再構成については、今村峯雄・藤尾慎一郎・西本豊弘らと重ねてきた議論を考慮しつつ小林が春成と協議の上、現時点における解釈を示した。

①……………河内地域の弥生前期・中期の土器付着物年代測定遺跡と資料

はじめに今回測定対象とした河内湖（潟）東部・南部地域の遺跡及び測定対象資料を提示する。ただし、資料が多数に上るため、調査報告書に測定結果をレポートした遺跡については概略の記述にとどめ、測定結果を測定対象資料とともに提示したことがない資料（報告書刊行後に測定した資料）を中心に示す。また、本稿で直接扱う縄文晩期末長原式、弥生前期・中期土器付着物資料以外は、本稿では詳細は省く。なお、弥生中期の年代決定の上では重要な役割を果たす、瓜生堂遺跡出土木棺底板のウイグルマッチング結果については、別稿にて報告した〔坂本他 2006〕。

これらの土器の編年の位置づけは、秋山浩三をはじめとする各関係者によるが、いくつかは流動的な個体も含む。河内地域の時期設定は、寺沢薫・森井貞雄と森岡秀人各氏による近畿地方弥生土器の時期設定〔寺沢・森岡ほか 1989〕に大きく準拠し、亀井遺跡における広瀬和雄による編年案〔広瀬 1986〕と秋山浩三による整理〔秋山 1996, 2007〕の対比を加味して河内〇—〇期で表す。Ⅰ～Ⅳ期は、基本的に小林行雄・佐原真の弥生土器様式編年に対比されるが、河内Ⅳ-1・2 期は弥生第三様式後半に対比され、Ⅴ・Ⅵ期は弥生後期第五様式を含む段階に対比されるなど、相違を含む。

測定対象とした土器資料のうち美園遺跡、亀井遺跡、山賀遺跡などの資料は、寺沢薫らの編年基準となっている資料から秋山が選択した資料である。

下記に遺跡毎に測定試料を紹介するが、1～9 は大阪府文化財センター所蔵資料、10 は大阪府教育委員会所蔵資料、11～13 は東大阪市教育委員会所蔵資料である。

以下の試料の処理・調整については、国立歴史民俗博物館年代測定室でのこれまでの処理に準ずる。前処理についての詳細は、別稿を参照されたい〔小林 2005〕。

- (1) 前処理：有機溶媒による油脂成分等の除去、酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA 処理）。
- (2) 燃焼による二酸化炭素化：酸化銅により試料を燃焼、真空ラインを用いて不純物を除去。
- (3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

AMS による ^{14}C 測定は、東京大学大学院工学系研究科のタンデム加速器施設（機関番号 MTC）で行った他、地球科学研究所を通してベータアナリティック社（測定機関番号 Beta）、（株）パレオラ

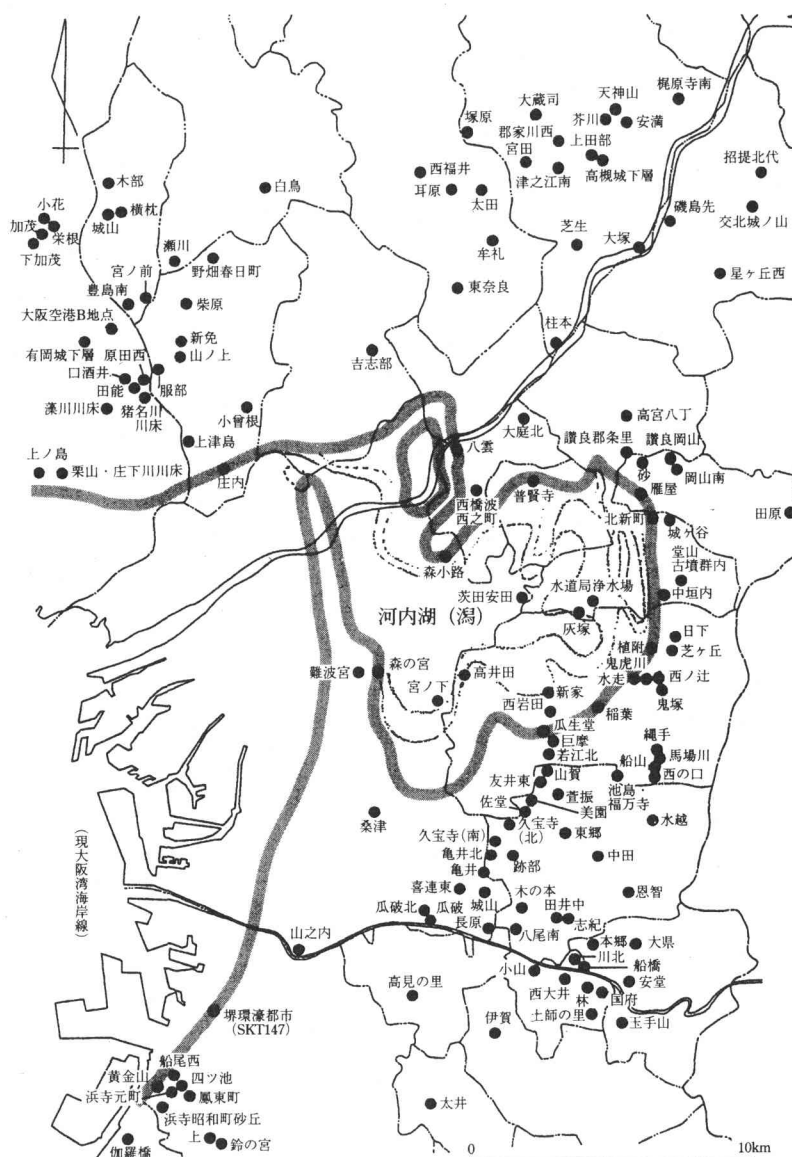


図1 河内湖周辺部等における縄文晩期・弥生前期遺跡分布(秋山 2007 より)

1 池島・福万寺遺跡

所在地は東大阪市池島町・八尾市福万寺町、沖積地に立地する。恩智川治水緑地建設に伴い、大阪府文化財センターが継続的に調査しているが、弥生時代から近世の水田遺構が重層的に検出されている。調査成果は概要および一部は報告書として刊行されており、年代測定成果は 2007 年に刊行された『池島・福万寺遺跡 3』に掲載した〔年代測定研究グループ 2007c〕⁽¹⁾。

池島・福万寺遺跡では、縄文時代後期、晩期、弥生時代中期、後期の土器付着物の年代測定を行っている。

資料番号：OSF 2

縄文時代後期 元住吉山 I 式 $3520 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、校正年代 1950–1740cal BC (95.4%)

当資料は、池島・福万寺遺跡で確立された基本層序の第 15-2 層直上、第 15-2 面上で出土したものである。同一調査区 (96-1 調査区) では、共伴する資料の出土は見られないが、周辺の調査区でも同一層準から、概ね同時期の遺物が出土している〔岡戸編 1997, 廣瀬編 2007〕。

資料番号：OSF 6'

縄文晩期 長原式 (新) $2485 \pm 35^{14}\text{C BP}$ 、校正年代 770–500cal BC (89.5%)

当資料は、池島・福万寺遺跡の基本層序の第 14-2 層上 (第 14-2 面上) で出土したものである。第 14-2 面では、調査箇所により弥生時代前期中頃の水田遺構が検出されるが、この資料が出土した調査区では、水田遺構の検出は見られなかった。第 14-2 面上や第 14-2 層中で、本資料と同時期と考えられる遺物の出土が見られる。同一面上で弥生時代前期初め～中頃の遺物も見られる〔廣瀬編 2001, 同 2007〕。

資料番号：OSF 39

河内 II-2 ～ 3 期 $2290 \pm 35^{14}\text{C BP}$ 、校正年代 405–350 cal BC (58.4%)・295–225 cal BC (34.1%)

当資料は、池島・福万寺遺跡の基本層序の第 13 層上 (第 13 面上) で出土したものである。第 13 面では、水田遺構が検出されている。当資料出土調査区では、弥生時代前期後葉頃の土器が同一面上やこの面を覆う自然堆積層中から出土している。なお、第 13 層から出土する遺物は、ほぼ前期に限られ、当面の水田の開発は前期後葉で、その廃絶が中期初頭と考えられている〔岡本編 1998, 廣瀬編 2007〕。

資料番号：OSF 45

河内 III ～ IV-1・2 期 $2115 \pm 35^{14}\text{C BP}$ 、校正年代 205–45 cal BC (90.0%)

当資料は、池島・福万寺遺跡の基本層序第 11b 層から出土したものである。第 11b 層とは、弥生時代中期中葉 (～後葉) 頃の水田面である第 12 面を覆う自然堆積層のことであり、この上層には弥生時代後期の水田面である第 11 面がある。なお、池島・福万寺遺跡全体では、池島地区側 (本資料出土) と福万寺地区側で時期差があることがわかってきており、福万寺地区側の水田は中期後葉である〔岡本編 1998, 秋山・朝田編 2000, 廣瀬編 2007〕。

以上の他、弥生後期以降の資料として OSF90 (河内 V-0 期), OSF105 (河内 V-3 期), OSF101 (河内 V-3 期) の、第 11b 面溝 30 より出土した 3 試料がある。第 11b 面とは、弥生時代後期の土壌化層 (第 11-2a 層) を除去した面のことで、第 11-2 面では、弥生時代後期の水田遺構が検出されており、その水田景観が形成される以前の遺構がこの溝 30 である。なお、溝 30 は下面 (第 12 面) で確認さ

れた水路60の直上にあたり、同水路を踏襲したものとされる。溝30は植物遺体を多く含む泥で埋積され、溝の西肩部から多くの遺物が出土し、後期前葉の短い期間に投棄されたものとされる。なお、溝の東肩は明確ではない。また、溝30から西約25mの地点では掘立柱建物も確認されている[井上編2002]。これら、弥生後期以降の水田経営については、別途年代的にも整理を進めていく必要がある。なお、OSF102（河内V-3期）、OSF103（河内V-3期）の弥生後期資料についても測定を行っているが、ここでは略す。

以上、池島・福万寺遺跡では、縄文晩期末または弥生前期に併行する可能性が指摘されている長原式 OSF-6' は 770-500 cal BC に含まれる可能性が約 90% である。

弥生中期Ⅱ期 OSF39 は 405-350 cal BC に含まれる可能性が 58%、295-225 cal BC に含まれる可能性が 34% と、やや幅広く可能性が分かれる。弥生中期Ⅲ期 OSF45 は、205-45 cal BC に含まれる可能性が 90% である。

2 若江北遺跡

所在地は東大阪市若江西新町、沖積地に立地し、都市計画道路跨道橋建設に伴い調査された⁽²⁾。第5次発掘において弥生前期の居住関係遺構面が検出され、前期はじめの一定のまとまりをみせる良好な資料の土器群が出土しており、その付着物を測定した。

資料番号：OSF 7

河内Ⅰ-1期 $2480 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 770-480 cal BC (87.4%)

試料番号：OSF 8re

河内Ⅰ-1期 $2515 \pm 35^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 790-535 cal BC (94.4%)

上記の2試料は、いずれも同一遺構、第9b面溝25から出土した試料である。第9b面とは、弥生時代前期の遺物を多く含む黒色粘土層（12a層）を除去した面のことである。

溝25は、自然堤防上において堅穴住居、柵、土坑、ピットとともに検出された溝であり、河川3の最終堆積にあたる。出土遺物には土器、土製品（紡錘車、土錘）、石器（砥石、叩石、台石、石刀？、投弾？）、植物遺体などがみられる。なお、溝25出土の土器には、縄文時代滋賀里Ⅲb式の深鉢などが若干ながら含まれる。

今回の測定対象資料以外ではあるが、溝25と同様に第9b面に帰属する土坑14、土坑15出土の弥生時代前期の土器が今後の検討対象として適していると思われる。

土坑14は、平面形が不定形を呈し、埋土に炭化物を含む土坑である。出土遺物は土器の他には、石器（砥石、サヌカイト剥片など）がわずかにみられるに過ぎない。土坑14は、後出する土坑16に切られているものの、両者の遺物出土状況から土坑14出土土器の一括性は非常に高いと思われる。

土坑15は、断面が2段の舟底形を呈する土坑である。出土遺物は土器が大半であり、これに土製品（紡錘車）、石製品（投弾？）、焼土塊が若干含まれる。

報告では両土坑はほぼ同時期の所産と推定しているようであるが、土器属性の検討からするならば、土坑15の方が先行する可能性がみられる[秋山2000、同2007]。このことなどからも、さらに年代測定研究を進めるべき遺跡である。

3 瓜生堂遺跡

所在地は東大阪市西岩田町・岩田町，沖積地に立地し，近鉄奈良線連続立体交差化事業に伴い調査された。⁽³⁾

大阪府文化財センター調査地点（遺跡北東地域）からの出土資料では，弥生時代前期～古墳時代前期土器の，土器付着炭化物 7 点について ^{14}C 年代を得た。別に，東大阪市立埋蔵文化財センターが調査した弥生中期第 3 様式（河内Ⅳ-1 期）の土器を伴う方形周溝墓の木棺（4 号墓 5 号木棺）底板について年輪試料からウイグルマッチングを行い，辺材最外縁の部分で最頻値 BC175 年の結果を得ている [坂本他 2006]。

資料番号：OSF 12

河内Ⅰ-2 期 $2440 \pm 40^{14}\text{C BP}$ ，較正年代 750–685 cal BC (21.6%)・665–610 (12.6%)・595–405 cal BC (61.3%)

当資料は，弥生時代前期（河内Ⅰ-2 期）に対比される。第 25 面土坑 S04198 という 99-4 調査区東半の平面長円形の小形土坑から出土したものである。共伴資料として同時期の甕・壺・鉢・甕蓋があるが，全形が判明するのは甕のみである。壺には沈線が 3 条のものがみられ，それに重ねて縦位沈線を施す個体もある。甕には口縁端部刻目，頸部沈線をめぐらすものがある。沈線の条数は，判明しているもので 2 条ないし 3 条である。測定試料における炭化物は，口縁外面に顕著に付着していた。

750–400cal BC 年頃，炭素年代で 2450^{14}C BP 頃は，炭素濃度の変化に乏しく，年代の上では「2400 年問題」と俗称される時期に当たり，暦年代を絞りにくい。弥生時代前期に属する OSF12 の較正年代は，まさにこの期間に相当し，750–400cal BC 頃に相当する。

このほかに弥生後期～古墳前期の土器付着物 6 点を測定したが，本稿の対象からは外れるので，詳述しない。なお，このうちの弥生時代後期（Ⅴ-3～Ⅵ-1 期）の甕形土器 OSF109 は内面の付着物で， $\delta^{13}\text{C}$ 値が -11.6% と特に重く，調理の際のお焦げであり，調理の食物が，例えば C_4 型の植物（アワ・ヒエ・キビなども含まれる）などであった可能性が考えられる [小林 2006]。

4 山賀遺跡

所在地は八尾市新家町・東大阪市池島町，沖積地に立地し，近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い調査された。⁽⁴⁾

資料番号：OSF 18

河内Ⅰ-3 期 $2470 \pm 40^{14}\text{C BP}$ ，較正年代 765–680cal BC (26.9%)・670–480cal BC (57.1%)・470–410cal BC (11.5%)

当資料は，「第Ⅰ様式中段階第 2 遺構面」土坑 10 から出土したものである。出土遺物には土器少量と石器 13 点があり，土器にはいずれも煤や炭化物が大量に付着していた。この土坑の土器群をみると，本試料以外の個体はやや古い様相を示し，河内Ⅰ-1 期の標式データにあてられているものである。なお，土坑 10 は溝 2 と重複しており，溝 2 に切られている可能性が高いが詳細は不明である。

資料番号：OSF 16

河内Ⅰ-3期 $2530 \pm 40^{14}\text{C BP}$, 較正年代 795-535cal BC (94.9%)

資料番号: OSF20-b

河内Ⅰ-3(～4)期 $2470 \pm 40^{14}\text{C BP}$, 較正年代 765-680cal BC (26.9%)・670-480cal BC (57.1%)
・470-410cal BC (11.5%)

当2資料は、「第Ⅰ様式中段階」包含層から出土したものである。同包含層の出土遺物には土器・石器・木器などがあり、大半は河川7が土砂を運び込んだ自然堤防上で検出された掘立柱建物の周辺から出土したとされている。河川7出土の大量の遺物は便宜的に「上」・「中」・「下」層として取り上げられているが、若干の時期幅がある。そのうち、中層資料は、少し混在品を含むものの、河内Ⅰ-2期の標式となる量的に豊富なデータとされているものに相当する。

5 美園遺跡

所在地は八尾市美園町、自然堤防上に立地し、近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い調査された。⁽⁵⁾

資料番号: OSF 23

河内Ⅰ-4(～Ⅱ-1)期 $2270 \pm 30^{14}\text{C BP}$, 較正年代 395-350 cal BC(46.8%)・300-225 cal BC(44.4%)

当資料は、弥生時代前期遺構面 BSD220(溝)から出土したものである。弥生時代前期遺構面は、縄文時代晩期の河川跡の水流によって堆積した黄色砂(第Ⅸ層)をベースにしており、微高地上に形成されている。このことは以下の資料が出土した遺構についても同様である。

BSD220は断面U字状を呈し、埋土が粘質土と微砂質土の上下2層に大別できる。出土遺物の大半は上層の粘質土層から出土しており、その内容には、土器(大量の前期土器と少量の中期初頭土器)、土製品(円板、焼土塊、不明品)、石器(石鏃、石槍、不定形石器、石庖丁、大型石庖丁、扁平片刃石斧、叩石、投彈?、砥石、楔形石器、台石、軽石、石核、剝片、自然石)、木器(鋏、容器、弓、櫛、板材、柱根)がみられる。

資料番号: OSF 26re

河内Ⅱ-1期 $2240 \pm 35^{14}\text{C BP}$, 較正年代 390-340 cal BC (27.2%)・325-205 cal BC (68.3%)

当資料は、弥生時代前期遺構面 BSD212(溝)から出土したものである。

BSD212からは、土器(前期土器と若干の中期初頭土器)、土製品(円板)、石器(不定形石器、剝片、叩石、自然石)、木器(板材、分割材)が出土している。

資料番号: OSF 30

河内Ⅱ-1期 $2250 \pm 40^{14}\text{C BP}$, 較正年代 325-205 cal BC (64.6%)・395-340 cal BC (30.8%)

当資料は、弥生時代前期遺構面 BSK210(土坑)から出土したものである。

BSK210は不定形平面を呈する落ち込み状の遺構である。出土遺物には、土器(前期及び中期初頭)、石器(石鏃、不定形石器、石核、叩石、自然石)、木器(狭鋏、そり)がみられる。

資料番号: OSF 32

河内Ⅱ-2期 $2320 \pm 40^{14}\text{C BP}$, 較正年代 510-435 cal BC (10.8%)・430-350 cal BC (67.4%)・290-230 cal BC (16.1%)

当資料は、弥生時代前期遺構面 BSK258(土坑)から出土したものである。

BSK258 は円形平面、逆台形断面を呈し、埋土は粘質土、粘土、砂質土が交互に堆積している。また、一部に貝層も認められる。出土遺物には、土器（前期と中期初頭）、土製品（円板）、石器（剥片、石核、自然石）、獣骨がみられる。

6 新上小阪遺跡

所在地は東大阪市新上小阪、沖積地に立地し、府営住宅建て替えに伴い調査された⁽⁶⁾。

資料番号：OSF 36

河内Ⅱ-3 期 $2270 \pm 30^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 395-350 cal BC (46.8%)・300-225 cal BC (44.4%)

資料番号：OSF 37

河内Ⅱ-2～3 期 $2295 \pm 30^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 405-355 cal BC (70.6%)・290-230 cal BC (24.8%)

上記の 2 試料は、いずれも同一遺構、第 7b 面土坑 633 から出土した資料である。第 7b 面とは、河内Ⅱ期の遺物を多く含む土壌化層（第 7 層）を除去した面にあたる。なお、この土壌化層（第 7 層）から出土した資料についても分析を実施しており、これについては後述する。

土坑 633 は、居住域の位置する微高地の縁辺に掘削された土坑であり、他の遺構との切りあいはない。用途不明木製品やイノシシ下顎骨なども出土している。なお、633 土坑出土の土器のうち、甕はいずれも煤の付着が著しいが、土坑内に焼土は見られず、土器の割れ口が煤化しておらず、土坑内で二次焼成を受けたものではないと思われる。

資料番号：OSF 35

河内Ⅱ-3 期 $2250 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 395-340 cal BC (30.8%)・325-205 cal BC (64.6%)

資料番号：OSF 38

河内Ⅱ-2～3 期 $2210 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 385-185 cal BC (95.4%)

OSF35（河内Ⅱ-3 期）・38（河内Ⅱ-2～3 期）は、第 7 層より出土した資料である。上記のとおり、第 7 層は、河内Ⅱ期の遺物を多く含む土壌化層である。なお、OSF35 の土器は蓋の内面に炭化物が、OSF38 の土器は内面の体部最大径付近に厚さ 3mm 以上の炭化物がそれぞれ付着している。

7 亀井遺跡

所在地は八尾市亀井町・亀井南町・大阪市平野区長吉出戸町、沖積地に立地する。2 冊の報告のうち、『亀井・城山』は、寝屋川南部流域下水道長吉ポンプ建設に伴う調査、『亀井（その 2）』は、近畿道天理～吹田線建設に伴う調査である⁽⁷⁾。

資料番号：OSF 33

河内Ⅱ-3 期 $2230 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 385-200 cal BC (95.5%)

溝 SD1801 の埋土中で、溝内全域にわたってほぼ同じレベルから出土した下層一括土器群中の資料である。これらの土器のいくつかは、河内Ⅱ-3 期の基準資料であり、完形品は少ないものの、大形破片が多くみられる。壺、甕、鉢、高坏、甕蓋の他にミニチュア土器、石器も含まれる。櫛描文は直線文・波状文が多いが、流水文（疑似流水文）や稚拙な簾状文もみられる。また、外面をヘラケズリする紀伊系の甕など、外来系土器も少数ながら存在する [広瀬・石神編 1986]。

資料番号：OSF 40

河内Ⅲ-1期 $2200 \pm 30^{14}\text{C BP}$ ・較正年代 375-190 cal BC (95.3%)

溝SD3014から出土した土器である。当遺構からは他にも壺、甕、鉢、甕蓋、土製円板、石器などが出土している。溝出土資料だが、大半は河内Ⅲ-1期の土器であり、河内地域の基準資料となっている。文様には櫛描きの直線文・波状文・簾状文などがみられる〔寺川・尾谷編1980〕。

8 私部南遺跡

交野市向井田1丁目地先ほかに所在し、第二京阪道路建設に伴い調査された。

本遺跡出土の弥生時代前期の土器付着物および住居柱材や杭材の年代測定を行った⁽⁸⁾。

次の上の山遺跡と同じく、2007年3月に刊行された報告書にレポートを提示している〔年代測定研究グループ2007a〕ので、個別の測定結果は省略し、重要な事例のみ提示しておく(図2)。

資料番号：OSF-C1-1～21

河内Ⅰ-4期 C1-1 $2410 \pm 20^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 540-400 cal BC (91.6%)

木材についてみると、20年分の年輪を観察したOSF-C1は、すべての年輪試料が、おおよそ同一の年代を示し、2400年頃の較正曲線が平坦な時期に相当していると考えられる。同一遺構の別の柱材であるC2、C3はやや古い値を示すものもあるが、やはり「2400年問題」の範囲に入り、C3はやや古く紀元前500年以前に最も高い確率となるが、C1、C2を考えると、前400年よりやや新しい年代(C2で前415-385年まで)を中心に考えるのが妥当と思われる年代である。

資料番号：OSF 192

縄文晩期長原式 $2475 \pm 25^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 765-680 cal BC (30.7%)、675-505 cal BC (59.8%)

資料番号：OSF 193

縄文晩期長原式 $2505 \pm 25^{14}\text{C BP}$ $\delta^{13}\text{C} -23.5\%$ 、較正年代 775-705 cal BC (22.6%)、695-540 cal BC (72.5%)

縄文晩期長原式の土器付着物では、OSF193は内面付着で $\delta^{13}\text{C} -23.5\%$ と海洋リザーバー効果の影響を受けている可能性があり海産物の煮焦げを考慮する必要があるが、OSF192は、弥生前期の年代に重なっており、同一時期に共存していたと考えるのが自然である。

資料番号：OSF 230

河内Ⅰ-4期 $2405 \pm 25^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 540-400 cal BC (88.6%)

資料番号：OSF 232a および b

河内Ⅰ-4期～Ⅱ-1期 外面付着のbで $2405 \pm 25^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 540-400 cal BC (88.6%)

弥生前期末の土器付着物では、OSF216のみは、測定試料の炭素量不足が原因で不安定な測定となり、信頼性に欠けるため除外すると、その他はすべて較正曲線が平坦な「2400年問題」の年代範囲に含まれる。その中でも後半、すなわち前600年代よりは新しく、前400年代よりは古い年代に含まれることは確実である。瓜生堂遺跡をはじめとする、これまでの測定例と照らすと〔今村2004など〕、近畿地方の弥生時代前期の暦年代として、整合的であると考えられる。

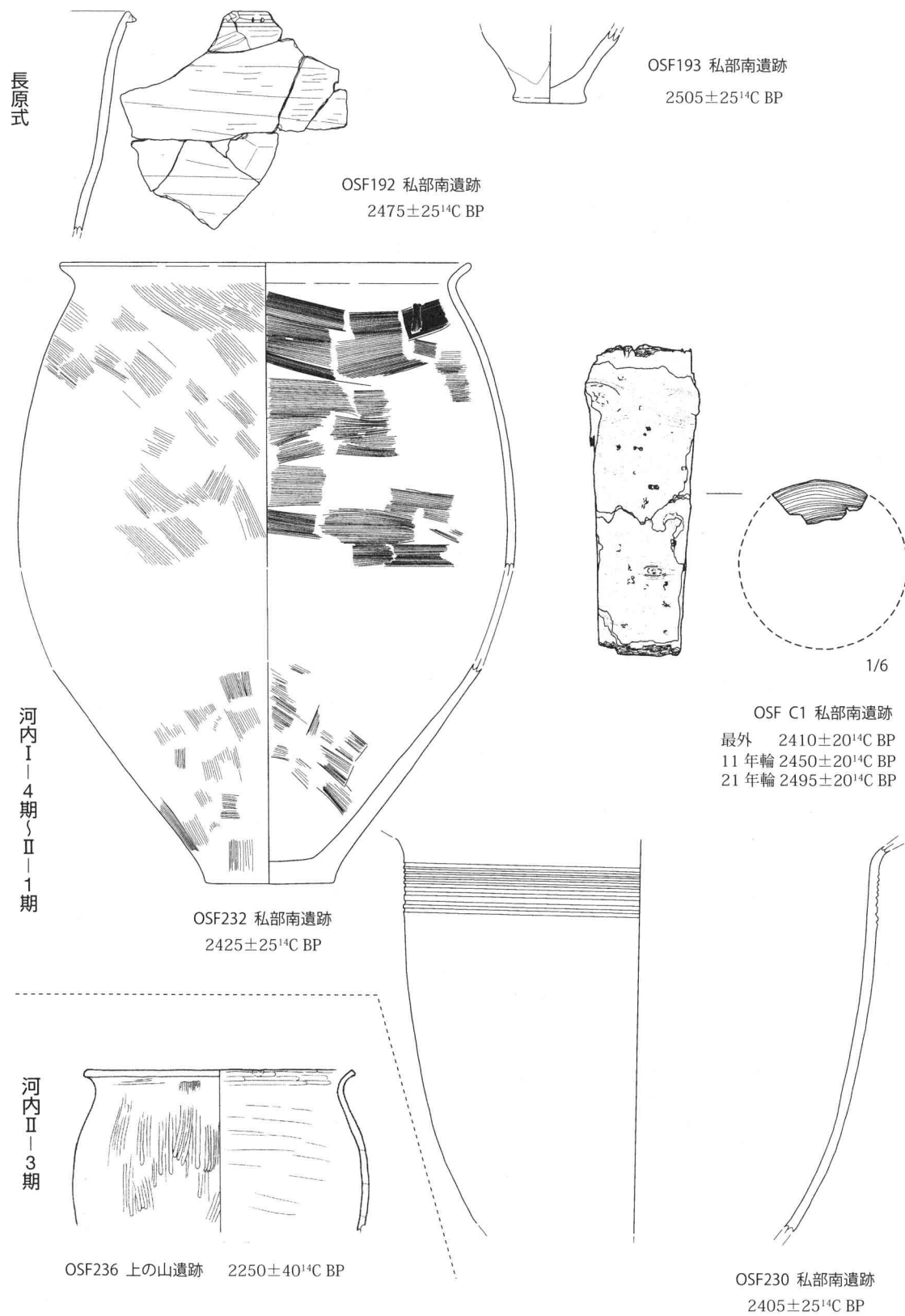


図2 私部南遺跡・上の山遺跡年代測定採取試料 (S=1/4)

9 上の山遺跡

交野市私部西5丁目・枚方市茄子作南町先に所在し、第二京阪道路建設に伴い調査された。枚方丘陵東端部中位段丘上に位置し、弥生中期前葉の独立棟持柱を持つ大形掘立柱建物を検出している。段丘西側の開析谷には、弥生中期土器溜まりも見つかっている。本遺跡出土の弥生時代中期の土器付着物1点の年代測定を行った⁽⁹⁾。

資料番号：OSF 236

河内Ⅱ-3期 $2250 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 395-340 cal BC (30.8%)、325-205 cal BC (64.6%)

測定結果の $\delta^{13}\text{C}$ 値は、 -27.8% と通常の陸生植物に由来する可能性を示唆している。較正年代を見ると、95%の確率で紀元前395-前205年の年代に含まれ、その中でも前325-205年に含まれる可能性が高い。弥生時代中期前葉の年代として、これまでの我々の測定結果と整合的である。

10 木の本遺跡

大阪府八尾市空港1丁目に所在する。弥生時代前期の流路から、多数の弥生前期土器と、突帯文系土器が出土した。多くの流路が検出されている田井中遺跡とつながる可能性がある⁽¹⁰⁾。測定土器については、図3に示すが、いずれも流路中からの出土であるため、編年の位置づけを設定しにくいものも多い。他に流路出土の木材OSKY-C1を測定したが、古墳時代の年代が測定されている。流路がかなり長期にわたり流れていた可能性が考えられる。

資料番号：OSKY 6

縄文晩期長原式 $2480 \pm 45^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 770-480 cal BC (86.0%)・465-415 cal BC (9.5%)

資料番号：OSKY0378b

河内Ⅰ-1(～Ⅰ-2)期 $2465 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年 760-680 cal BC (25.8%)、670-475 cal BC (56.1%)、470-410 cal BC (13.6%)

資料番号：OSKY 0379

河内Ⅰ-1(～Ⅰ-2)期 $2410 \pm 30^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 740-690 cal BC (11.7%)、545-400 cal BC (81.1%)

資料番号：OSKY 0385

河内Ⅰ-1(～Ⅰ-2)期 $2490 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 780-495 cal BC (89.1%)

資料番号：OSKY 0420

河内Ⅰ-1(～Ⅰ-2)期 $2430 \pm 30^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 750-685 cal BC (19.1%)、570-400 cal BC (68.9%)

資料番号：OSKY 0347

河内Ⅰ-1(～Ⅰ-2)期 $2360 \pm 50^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 570-355 cal BC (81.8%)

資料番号：OSKY 0353

河内Ⅰ-1(～Ⅰ-2)期 $2470 \pm 130^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 845-350 cal BC (91.7%)

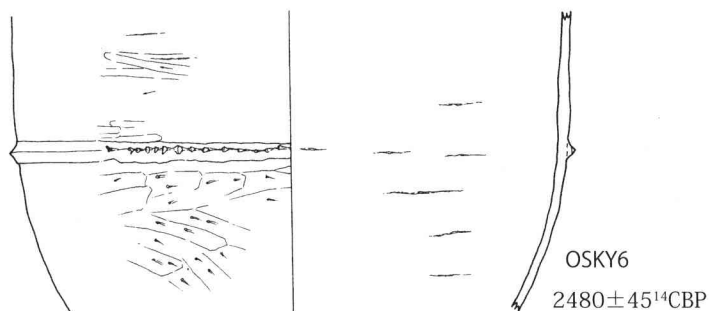
347・353はやや測定誤差が大きいが、較正年代上では前6・5世紀を含み、他の同時期の測定資料と矛盾はない。

河内Ⅰ-1(～Ⅰ-2)期 $2370 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 750-685 cal BC (11.0%)、595-365 cal BC (81.3%)

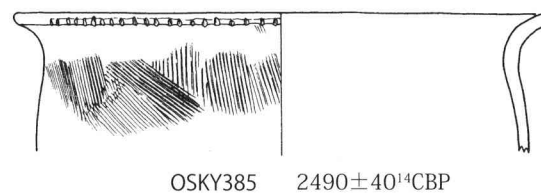
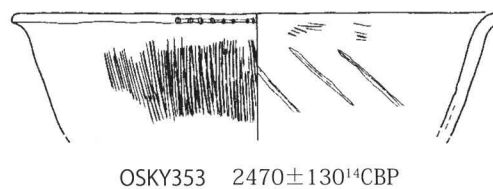
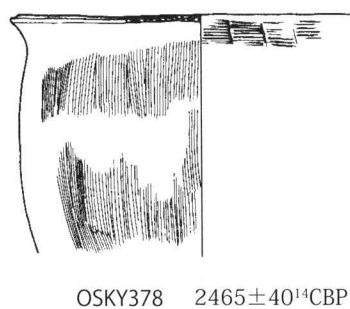
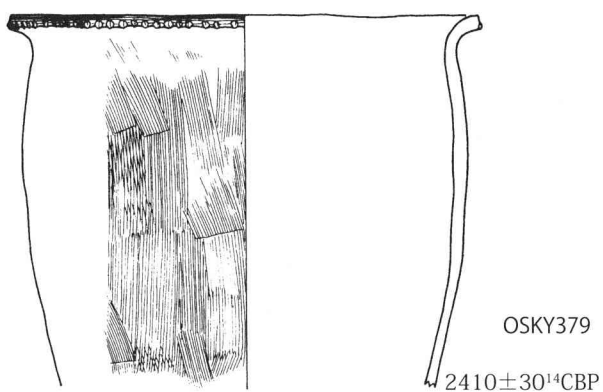
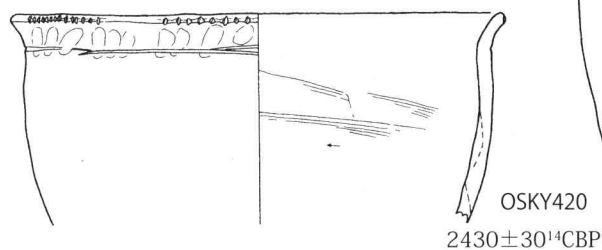
$\delta^{13}\text{C}$ 値が重たく、内容物についての検討が必要である。

資料番号：OSKY 0406b

長原式



河内 I-1 期



(河内 I-2 期)

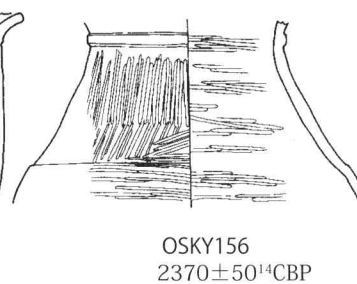
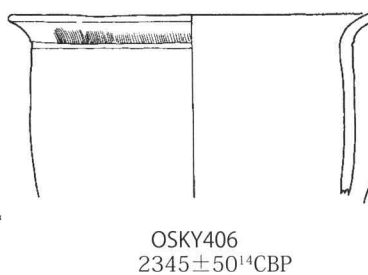
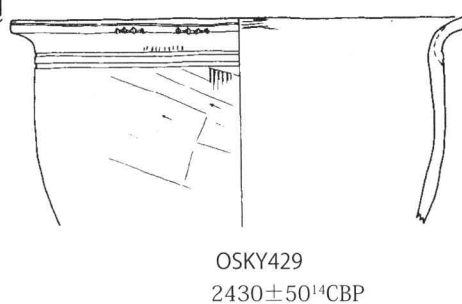


図 3 木の本遺跡年代測定試料採取土器 (S=1/4)

河内Ⅰ-1(～Ⅰ-2)期 2345 ± 50 ^{14}C BP, 較正年代 545-350 cal BC (81.1%)

資料番号: OSKY 0429

河内Ⅰ-2期 2430 ± 50 ^{14}C BP, 較正年代 755-685 cal BC (20.1%), 670-605 cal BC (12.6%),
600-400 cal BC (62.7%)

以上, 2490 から 2345^{14}C 年代の測定値に含まれる。このことは, 木の本遺跡の弥生前期前半及びそれと一緒に出土した長原式土器が, 前6世紀後半～前5世紀に含まれるという可能性を強く示唆する。

長原式・弥生前期土器ともすべてSD183流路内の中・下層からの出土である。測定結果から2400年間題後半に含まれる可能性が高く, Ⅰ期の古い段階の中では若江北・水走両遺跡よりは新しい可能性がある。該当資料は, 河内Ⅰ-2期の標式とされている山賀遺跡河川7の中層の土器群とくらべるなら, おおむね古い様相を示すため, 河内Ⅰ-1期に相当させてよいものとなっている。ただし, 前出の若江北遺跡第5次資料〔三好編1996〕は, 上記の木の本遺跡SD183中・下層資料より型式学的にみて, 明らかに先行する。したがって河内Ⅰ-1内を新古に細分すべき資料的環境が現在では整いつつある。このあたりの様相差が ^{14}C 測定値に反映されているのであろう。

資料番号: OSKY 0156

11 宮ノ下遺跡1次調査

東大阪市長堂1・2丁目に所在する。布施駅駅前再開発ビル建設に伴う調査が行われた。セタシジミを中心とした貝塚が見つかる⁽¹¹⁾。なお, 宮ノ下・鬼塚・水走遺跡の測定対象土器については, 図4に示す。

資料番号: OSH 05

縄文晩期滋賀里Ⅲ式か 2620 ± 40 ^{14}C BP, 較正年代 850-755 cal BC (88.3%)

資料番号: OSH 06

縄文晩期長原式(古)か 2550 ± 40 ^{14}C BP, 較正年代 805-720 cal BC (41.3%), 690-540 cal BC (54.2%)

口縁部突帯文が端部につく。突帯上にD字形の刻み目を施す。

資料番号: OSH 09

縄文晩期長原式(古)か 2510 ± 40 ^{14}C BP, 較正年代 795-510 cal BC (94.1%)

口縁部がわずかに外反する器形, 突帯上にD字形の刻み目を施す。

資料番号: OSH 4

縄文晩期長原式 2570 ± 40 ^{14}C BP, 較正年代 810-735 cal BC (55.2%), 690-660 cal BC (13.9%),
650-545 cal BC (26.5%)

資料番号: OSH 3

弥生前期 2425 ± 35 ^{14}C BP, 較正年代 750-685 cal BC (18.4%), 595-400 cal BC (71.3%)

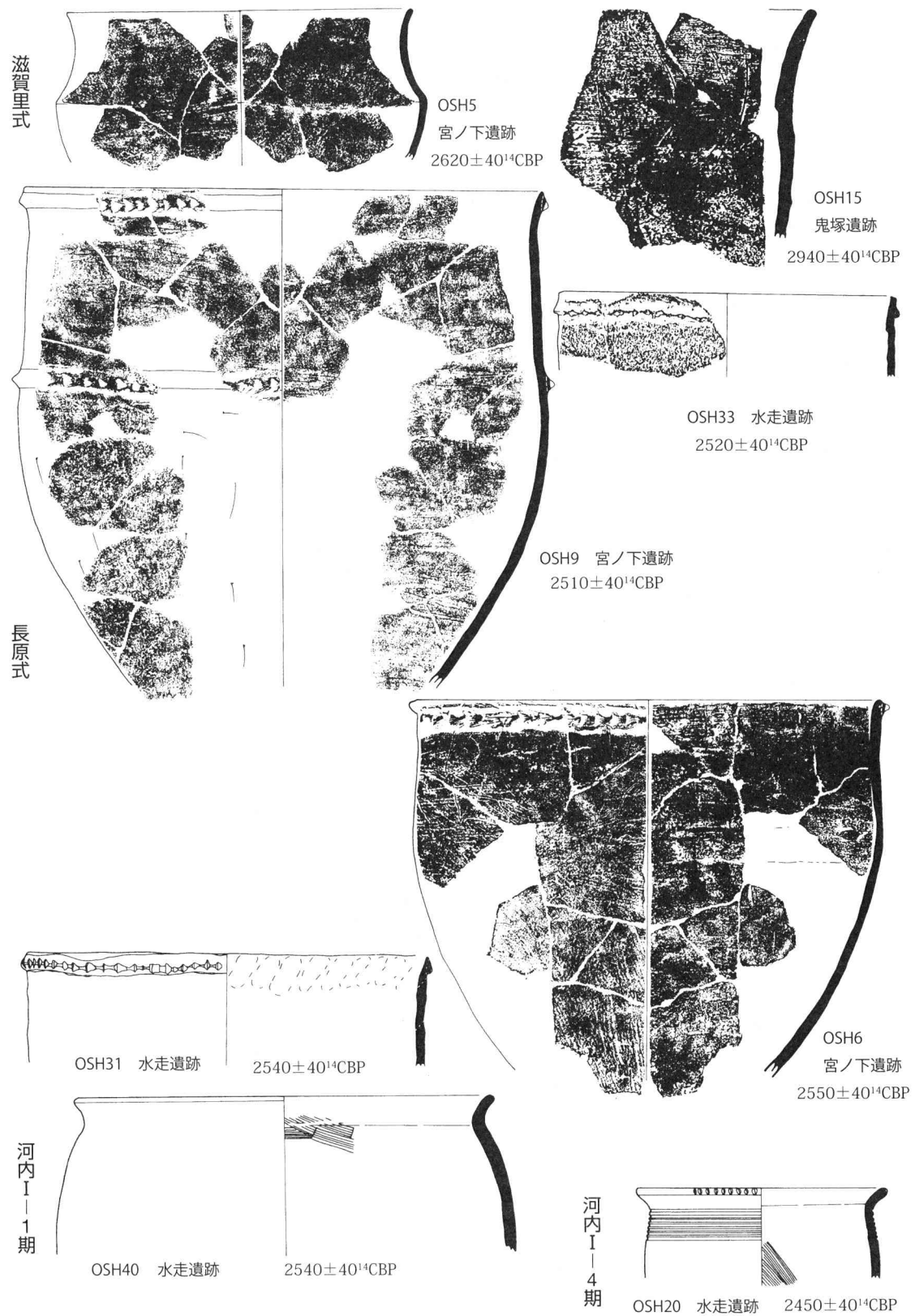


図4 東大阪市年代測定試料採取土器 (S=1/4)

12 鬼塚遺跡 8 次調査

東大阪市箱殿町・新町・南荘町・豊浦町に所在する⁽¹²⁾。

資料番号：OSH 15

縄文晩期滋賀里Ⅱ式 $2940 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 1270–1015 cal BC (94.5%)

13 水走遺跡 8 次調査

東大阪市水走到所在、阪神高速道路水走ランプ建設工事に伴い調査された⁽¹³⁾。

資料番号：OSH 31

縄文晩期長原式 $2540 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 800–705 cal BC (36.9%)、695–540 cal BC (58.6%)

資料番号：OSH 33

縄文晩期長原式 $2520 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 795–515 cal BC (95.4%)

資料番号：OSH 19

河内Ⅰ-1 (～2) 期 $2505 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 790–505 cal BC (93.1%)

資料番号：OSH 20

河内Ⅰ-4 (～Ⅱ-1) 期 $2450 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 755–685 cal BC (23.2%)、670–605 cal BC (15.4%)、600–405 cal BC (56.9%)

資料番号：OSH 40

河内Ⅰ-1 (～2) 期 $2540 \pm 40^{14}\text{C BP}$ 、較正年代 800–705 cal BC (36.9%)、695–540 cal BC (58.6%)

長原式土器と河内Ⅰ-1 (～2) 期の遠賀川系土器とがあり、同一時期に相当する炭素¹⁴年代値が測定されている。

以上の他、大阪府内の遺跡では、池上曾根遺跡（和泉市・泉大津市）〔秋山ほか2004〕の、弥生Ⅳ-3期に相当する土器を伴う大形建物柱材について、年輪年代と炭素年代測定を行っている〔坂本ほか2006参照〕。また、縄文晩期水田との可能性が指摘されたこともある茨木市牟礼遺跡では井堰遺構の杭及び突帯文土器付着物を測定し、土器付着物はやや古く縄文晩期の年代であるが、水田に関連するとされる杭は弥生前期の年代であることを確認している。高槻市安満遺跡では、弥生前期の壺に包含されていた漆を測定し、「2400年問題」後半の測定値を得ている。

②……………近畿地方における弥生時代前半期の実年代

以下に河内地域・近畿地方での年代観をまとめ、周辺地域と比べる。中国・四国地方のうち特に瀬戸内東部（岡山県）、近畿地方西部（神戸市付近）、さらに唐古・鍵遺跡に代表される奈良盆地、竜ヶ崎A遺跡など琵琶湖東岸を中心とする近江地域について概観し、西日本の東部における弥生移行期についてまとめる。

1 河内地域の縄文晩期から弥生

前章で検討した河内地域の各遺跡の年代測定結果をまとめ、土器型式の時期ごとに較正年代の確率密度分布を配列すると表3のようになる。また、較正曲線（IntCal04）との関係を比べるため、

表 1 大阪府内の炭素 14 年代測定資料一覧

試料番号	遺跡名	遺跡所在地	担当機関名	種類大分類	種類小分類	採取部位	時代	土器型式	報告書図番号
OSF-12	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	口縁外	弥生前期	河内Ⅰ-2 期	2004『瓜生堂遺跡Ⅰ』第 43 図 3235
OSF-16	山賀遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-3 期	『山賀Ⅱ』39 図
OSF-18	山賀遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-3 期	『山賀Ⅱ』34 図
OSF-20-b	山賀遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-3 期～Ⅰ-4 期	『山賀Ⅱ』40 図
OSF-23	美園遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-4 期	『美園Ⅱ』167 図
OSF-26	美園遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生中期	河内Ⅱ-1 期	『美園Ⅱ』162 図
OSF-30	美園遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生中期	河内Ⅱ-1 期	『美園Ⅱ』132 図
OSF-32	美園遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生中期	河内Ⅱ-2 期	『美園Ⅱ』151 図
OSF-33	亀井遺跡	大阪府八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	焦	蓋内	弥生中期	河内Ⅱ-3 期	『亀井Ⅱ』276 頁 194 図 13
OSF-35	新上小阪遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	焦	蓋内	弥生中期	河内Ⅱ-3 期	『94 集新上小阪』173 頁 97 図
OSF-36	新上小阪遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	焦	胴外	弥生中期	河内Ⅱ-3 期	『94 集新上小阪』189 頁 108 図
OSF-37	新上小阪遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生中期	河内Ⅱ-2～3 期	『94 集新上小阪』189 頁 108 図
OSF-38	新上小阪遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	焦	胴内	弥生中期	河内Ⅱ-2～3 期	『94 集新上小阪』173 頁 97 図
OSF-39	池島・福万寺遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物		口縁外	弥生中期	河内Ⅱ-2～3 期	『池島・福万寺 X X I』86 頁 55 図
OSF-40	亀井遺跡	大阪府八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生中期	河内Ⅲ-1 期	『亀井・城山』117 頁 127 図
OSF-45	池島・福万寺遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	焦	底内	弥生中期	河内Ⅲ～Ⅳ-1・2 期	『池島・福万寺 X X I』77 頁 48 図、 池島福万寺遺跡 3-図 171-50
OSF-6'	池島・福万寺遺跡	大阪府東大阪市・八尾市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	焦	底内	縄文晩期	長原式(新)	『池島・福万寺 X X V』55 頁 35 図 1、35 図 2、 池島福万寺遺跡 3-図 220-5
OSF-7	若江北遺跡	大阪府東大阪市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-1 期	『15 集巨摩・若江北』98 頁 113 図
OSF-8	若江北遺跡	大阪府東大阪市	(財)大阪府文化財センター / 秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-1 期	『15 集巨摩・若江北』98 頁 113 図
OSH-05	宮ノ下遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物		胴外	縄文晩期	滋賀里Ⅲ～船橋式	『宮ノ下遺跡第 1 次』20 図報 75、写真図版 39 上
OSH-06	宮ノ下遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	煤	胴外	縄文晩期	滋賀里Ⅳ～長原式	『宮ノ下遺跡第 1 次』18 図報 40、写真図版 38 上
OSH-09	宮ノ下遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	煤	胴外	縄文晩期	船橋～長原式	『宮ノ下遺跡第 1 次』14 図版 3、写真 27
OSH-3	宮ノ下遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	煤	口縁外、胴外	弥生前期		『宮ノ下遺跡第 1 次』報告 236、28 図写真図版 47 下
OSH-4	宮ノ下遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	焦	口縁外、胴外	縄文晩期	長原式	『宮ノ下遺跡第 1 次』第 17 図報告 25、写真 36 下
OSH-15	鬼塚遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	煤	胴外	縄文晩期	滋賀里Ⅱ式	『鬼塚遺跡第 8 次』32 図報 144、写真図版 43 下
OSH-19	水走遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	煤	口縁外、胴外	弥生前期	河内Ⅰ-1 期	『水走・鬼虎川遺跡』45 図 103、写真図版 48 下
OSH-20	水走遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	煤	口縁外	弥生前期	河内Ⅰ期新(Ⅱに近い)	『水走・鬼虎川遺跡』45 図 104、図版 48 下
OSH-31	水走遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	煤	口縁外、胴外	縄文晩期	長原式	『水走・鬼虎川遺跡』56 図 705、写真図版 56 上
OSH-33	水走遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	煤	口縁外	縄文晩期	長原式	『水走・鬼虎川遺跡』56 図 621
OSH-40	水走遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター / 勝田邦夫	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-1 期	『水走・鬼虎川遺跡』14 図 176、写真図版 43 下
OSKY-0379	木の本遺跡	大阪府八尾市空港 1 丁目地内	大阪府教育委員会 / 岩崎二郎・横田 明	土器付着物	吹	口縁外	弥生前期	河内Ⅰ-1 期	『木の本遺跡』70 頁 58 図 379
OSKY-0385	木の本遺跡	大阪府八尾市空港 1 丁目地内	大阪府教育委員会 / 岩崎二郎・横田 明	土器付着物	吹	口縁外	弥生前期	河内Ⅰ-1 期	『木の本遺跡』70 頁 58 図 385
OSKY-0420	木の本遺跡	大阪府八尾市空港 1 丁目地内	大阪府教育委員会 / 岩崎二郎・横田 明	土器付着物	吹	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-1～2 期	『木の本遺跡』73 頁 60 図 420
OSKY-378-b	木の本遺跡	大阪府八尾市空港 1 丁目地内	大阪府教育委員会 / 岩崎二郎・横田 明	土器付着物	吹	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-1 期	『木の本遺跡』70 頁 58 図 378
OSKY-6	木の本遺跡	大阪府八尾市空港 1 丁目地内	大阪府教育委員会 / 岩崎二郎・横田 明	土器付着物	煤	胴外	縄文晩期	長原式	『木の本遺跡』37 図 6
OSKY-0156	木の本遺跡	大阪府八尾市空港 1 丁目地内	大阪府教育委員会 / 岩崎二郎・横田 明	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-2 期?	『木の本遺跡』43 図 156
OSKY-0347	木の本遺跡	大阪府八尾市空港 1 丁目地内	大阪府教育委員会 / 岩崎二郎・横田 明	土器付着物	吹	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-1 期	『木の本遺跡』56 図 347

OSKY-0353	木の本遺跡	大阪府八尾市空港1丁目地内	大阪府教育委員会／岩崎二郎・横田 明	土器付着物	吹	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-1期	『木の本遺跡』56図353
OSKY-0406-b	木の本遺跡	大阪府八尾市空港1丁目地内	大阪府教育委員会／岩崎二郎・横田 明	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-1～2期	『木の本遺跡』59図406
OSKY-0429	木の本遺跡	大阪府八尾市空港1丁目地内	大阪府教育委員会／岩崎二郎・横田 明	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-2期	『木の本遺跡』61図429
OSKY-C1-1	木の本遺跡	大阪府八尾市空港1丁目地内	大阪府教育委員会／岩崎二郎・横田 明	木材	杭		弥生前期?		『木の本遺跡』
OSTK-2	安満遺跡	大阪府高槻市	高槻市埋蔵文化財センター／森田克行	土器付着物	漆膜	胴内	弥生前期	摂津Ⅰ-1期	『弥生土器の様式と編年』1-1-19
OSBR-C1	牟礼遺跡	大阪府茨木市	茨木市教育委員会／奥井哲秀	木材	杭		縄文晩期?		高槻市年報1989,
OSBR-C2	牟礼遺跡	大阪府茨木市	茨木市教育委員会／奥井哲秀	木材	杭		縄文晩期?		高槻市年報1989,
OSBR-C3	牟礼遺跡	大阪府茨木市	茨木市教育委員会／奥井哲秀	木材	杭		縄文晩期?		高槻市年報1989,
OSBR-1	牟礼遺跡	大阪府茨木市	茨木市教育委員会／奥井哲秀	土器付着物	煤	口縁外, 胴外	縄文晩期?		高槻市年報1989, 図14-3
OSBR-2	牟礼遺跡	大阪府茨木市	茨木市教育委員会／奥井哲秀	土器付着物	焦	底内	弥生前期		高槻市年報1989, 図なし
OSBR-3	牟礼遺跡	大阪府茨木市	茨木市教育委員会／奥井哲秀	土器付着物	煤	胴外	縄文晩期?		高槻市年報1989, 図なし
OSH-C4-0	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最も内側	弥生中期	河内Ⅳ-1期	『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-10	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から10層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-20	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から20層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-30	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から30層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-40	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から40層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-50	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から50層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-60	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から60層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-70	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から70層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-80	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から80層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-90	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から90層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-100	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から100層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSH-C4-110	瓜生堂遺跡	大阪府東大阪市	東大阪市埋蔵文化財センター／勝田邦夫	木棺底板材		最内から110層目	弥生中期		『東大阪市47次Ⅰ』・坂本他2006
OSF-C1-1	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	柱材	モミ属	最外1年目	弥生前期	河内Ⅰ-4期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図62-6
OSF-C1-11	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	柱材	モミ属	最外11年目	弥生前期	河内Ⅰ-4期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図62-6
OSF-C1-21	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	柱材	モミ属	最外21年目	弥生前期	河内Ⅰ-4期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図62-6
OSF-C2	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	柱材	コナラ属 コナラ節		弥生前期	河内Ⅰ-4期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図62-7
OSF-C3	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	柱材			弥生前期	河内Ⅰ-4期	『154集私部南遺跡Ⅰ』登録番号651
OSF-192	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	口縁外	縄文晩期	長原式	『154集私部南遺跡Ⅰ』図47-6
OSF-193	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	焦	底内	縄文晩期	長原式	『154集私部南遺跡Ⅰ』図71-3
OSF-214	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-2～3期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図54-13
OSF-215	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	口縁外	弥生前期	河内Ⅰ-2～3期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図54-4
OSF-216	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	口縁外	弥生前期	河内Ⅰ-2～3期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図54-25
OSF-225	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	焦	胴内	弥生前期	河内Ⅰ-3～4期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図44-14
OSF-227	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	口縁外	弥生前期	河内Ⅰ-4期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図54-17
OSF-230	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	口縁外	弥生前期	河内Ⅰ-4期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図48-6
OSF-232-a	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	口縁外	弥生前期	河内Ⅰ-4～Ⅱ-1期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図43-1
OSF-232-b	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	胴外	弥生前期	河内Ⅰ-4～Ⅱ-1期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図43-1
OSF-224-b	私部南遺跡	大阪府交野市向井田一丁目	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	胴外上	弥生前期	河内Ⅰ-3～4期	『154集私部南遺跡Ⅰ』図54-6
OSF-236	上の山遺跡	大阪府交野市	(財)大阪府文化財センター／秋山浩三	土器付着物	煤	口縁外	弥生中期	河内Ⅱ-3期	『155集上の山遺跡Ⅱ』図109-526

表2 大阪府内縄文晩期から弥生中期の年代測定結果一覧

試料番号	遺跡名	機関番号	¹⁴ C BP	¹⁴ C 誤差	δ ¹³ C (‰)	較正年代 1 cal BC (%)	較正年代 2 cal BC (%)	較正年代 3 cal BC (%)	較正年代 4 cal BC (%)	較正年代 5 cal BC (%)					
OSF-12	瓜生堂遺跡	Beta-184558	2440	± 40	-26.0	750-685	21.6	665-610	12.6	595-405	61.3				
OSF-16	山賀遺跡	IAAA-40550	2530	± 40		795-535	94.9	530-520	0.6						
OSF-18	山賀遺跡	IAAA-40551	2470	± 40	-27.1	765-680	26.9	670-480	57.1	470-410	11.5				
OSF-20-b	山賀遺跡	Beta-197019	2470	± 40	-26.7	765-680	26.9	670-480	57.1	470-410	11.5				
OSF-23	美園遺跡	IAAA-40552	2270	± 30	-18.0	395-350	46.8	300-225	44.4	225-210	4.3				
OSF-26	美園遺跡	MTC-05223	2240	± 35	-25.4	390-340	27.2	325-205	68.3						
OSF-30	美園遺跡	IAAA-40553	2250	± 40	-15.4	395-340	30.8	325-205	64.6						
OSF-32	美園遺跡	IAAA-40554	2320	± 40	-16.6	510-435	10.8	430-350	67.4	290-230	16.1	220-210	0.8		
OSF-33	亀井遺跡	IAAA-40555	2230	± 40	-27.1	385-200	95.5								
OSF-35	新上小阪遺跡	Beta-189937	2250	± 40	-25.7	395-340	30.8	325-205	64.6						
OSF-36	新上小阪遺跡	IAAA-40556	2270	± 30	-26.1	395-350	46.8	300-225	44.4	225-210	4.3				
OSF-37	新上小阪遺跡	MTC-04590	2295	± 30	-24.9	405-355	70.6	290-230	24.8						
OSF-38	新上小阪遺跡	Beta-189935	2210	± 40	-26.7	385-185	95.4								
OSF-39	池島・福万寺遺跡	MTC-04591	2290	± 35		405-350	58.4	295-225	34.1	220-210	2.9				
OSF-40	亀井遺跡	IAAA-40557	2200	± 30	-27.0	375-190	95.3								
OSF-45	池島・福万寺遺跡	MTC-04592	2115	± 35	-27.0	345-315	5.4	205-45	90.0						
OSF-6'	池島・福万寺遺跡	MTC-04589	2485	± 35	-26.5	770-500	89.5	495-485	1.0	460-445	1.7	440-415	3.2		
OSF-7	若江北遺跡	IAAA-40549	2480	± 40	-25.8	770-480	87.4	465-415	8.0						
OSF-8	若江北遺跡	MTC-05409	2515	± 35	-23.1	790-535	94.4	530-520	1.1						
OSH-05	宮ノ下遺跡	Beta-188075	2620	± 40	-26.1	895-865	3.2	865-850	1.0	850-755	88.3	685-670	2.9		
OSH-06	宮ノ下遺跡	Beta-188076	2550	± 40	-26.6	805-720	41.3	690-540	54.2						
OSH-09	宮ノ下遺跡	Beta-188175	2510	± 40	-26.3	795-510	94.1	435-420	1.3						
OSH-3	宮ノ下遺跡	MTC-05949	2425	± 35		750-685	18.4	665-640	5.7	595-400	71.3				
OSH-4	宮ノ下遺跡	MTC-05950	2570	± 40		810-735	55.2	690-660	13.9	650-545	26.4				
OSH-15	鬼塚遺跡	Beta-188176	2940	± 40	-25.7	1290-1280	1.0	1270-1015	94.5						
OSH-19	水走遺跡	MTC-05951	2505	± 40		790-505	93.1	460-450	0.6	440-415	1.8				
OSH-20	水走遺跡	Beta-188177	2450	± 40	-24.4	755-685	23.2	670-605	15.4	600-405	56.9				
OSH-31	水走遺跡	Beta-188179	2540	± 40	-25.6	800-705	36.9	695-540	58.6						
OSH-33	水走遺跡	Beta-188178	2520	± 40	-24.1	795-515	95.4								
OSH-40	水走遺跡	Beta-188077	2540	± 40	-25.0	800-705	36.9	695-540	58.6						
OSKY-0379	木の本遺跡	IAAA-40850	2410	± 30		740-690	11.7	665-645	2.7	545-400	81.1				
OSKY-0385	木の本遺跡	Beta-196404	2490	± 40	-27.1	780-495	89.1	495-485	1.2	460-445	1.8	440-415	3.3		
OSKY-0420	木の本遺跡	IAAA-40851	2430	± 30	-27.1	750-685	19.1	665-640	5.4	590-575	2.0	570-400	68.9		
OSKY-C1-1	木の本遺跡	Beta-201251	1330	± 40	-26.0	AD645-AD775	95.5								
OSKY-378-b	木の本遺跡	MTC-05952	2465	± 40		760-680	25.8	670-475	56.1	470-410	13.6				
OSKY-6	木の本遺跡	MTC-05953	2480	± 45		770-480	86.0	465-415	9.5						
OSKY-0156	木の本遺跡	MTC-07464	2370	± 50	-20.2	750-685	11.0	665-640	3.1	595-365	81.3				
OSKY-0347	木の本遺跡	MTC-07465	2360	± 50		750-685	9.1	665-645	2.4	590-575	0.8	570-355	81.8	275-255	1.2

OSKY-0353	木の本遺跡	MTC-07466	2470	±130	-27.1	895-870	0.7	845-350	91.7	295-230	2.7	220-210	0.3		
OSKY-0406-b	木の本遺跡	MTC-07467	2345	±50		740-690	5.9	665-645	1.4	545-350	81.1	290-230	6.7	220-210	0.4
OSKY-0429	木の本遺跡	MTC-07468	2430	±50	-27.3	755-685	20.1	670-605	12.6	600-400	62.7				
OSTK-2	安満遺跡	Beta-201257	2440	±40	-29.5	750-685	21.6	665-610	12.6	595-405	61.3				
OSBR-C1	牟礼遺跡	Beta-201272	2440	±40	-29.6	750-685	21.6	665-610	12.6	595-405	61.3				
OSBR-C2	牟礼遺跡	Beta-201273	2520	±40	-28.0	795-515	95.4								
OSBR-C3	牟礼遺跡	Beta-201274	2420	±40	-26.4	750-685	17.9	665-635	6.0	620-610	0.8	595-400	70.8		
OSBR-1	牟礼遺跡	MTC-05946	2595	±35		830-750	84.2	685-665	7.1	635-620	1.5	615-590	2.7		
OSBR-2	牟礼遺跡	MTC-05947	2495	±35		785-505	92.8	460-450	0.7	440-415	1.9				
OSBR-3	牟礼遺跡	MTC-05948	2555	±35		800-735	48.0	690-660	16.0	650-545	31.5				
OSH-C4-0	瓜生堂遺跡	MTC-05848	2255	±40		395-340	32.6	325-205	62.8						
OSH-C4-10	瓜生堂遺跡	MTC-05849	2175	±40		375-145	90.7	140-110	4.8						
OSH-C4-20	瓜生堂遺跡	MTC-05850	2235	±40		390-335	25.6	330-200	68.7						
OSH-C4-30	瓜生堂遺跡	MTC-05851	2215	±40		385-190	95.4								
OSH-C4-40	瓜生堂遺跡	MTC-05852	2220	±40		385-195	95.5								
OSH-C4-50	瓜生堂遺跡	MTC-05853	2215	±40		385-190	95.4								
OSH-C4-60	瓜生堂遺跡	MTC-05854	2185	±40		380-160	93.4	130-115	2.0						
OSH-C4-70	瓜生堂遺跡	MTC-05855	2180	±40		380-150	92.2	135-115	3.2						
OSH-C4-80	瓜生堂遺跡	MTC-05856	2165	±40		365-95	95.4								
OSH-C4-90	瓜生堂遺跡	MTC-05857	2135	±40		355-285	19.4	230-45	76.0						
OSH-C4-100	瓜生堂遺跡	MTC-05858	2185	±40		380-160	93.4	130-115	2.0						
OSH-C4-110	瓜生堂遺跡	MTC-05859	2195	±40		385-165	95.4								
OSF-C1-1	私部南遺跡	PLD-4975	2410	±20		705-695	2.6	540-400	91.6						
OSF-C1-11	私部南遺跡	PLD-4976	2450	±20		750-685	28.8	665-640	9.0	590-410	57.6				
OSF-C1-21	私部南遺跡	PLD-4977	2495	±20		765-705	20.6	695-540	74.8						
OSF-C2	私部南遺跡	PLD-4978	2350	±20		485-460	4.3	450-440	1.4	415-385	89.6				
OSF-C3	私部南遺跡	PLD-4979	2480	±25		765-505	93.1	460-450	0.5	440-420	1.9				
OSF-192	私部南遺跡	PLD-4980	2475	±25	-25.8	765-680	30.7	675-505	59.8	490-485	0.4	460-450	1.3	440-415	2.8
OSF-193	私部南遺跡	PLD-4981	2505	±25	-23.5	775-705	22.6	695-540	72.5						
OSF-214	私部南遺跡	PLD-4982	2395	±25		705-695	2.0	540-395	92.8						
OSF-215	私部南遺跡	PLD-4983	2395	±25		705-695	2.0	540-395	92.8						
OSF-216	私部南遺跡	PLD-4984	2700	±110		1190-1175	0.5	1160-1140	0.7	1130-535	93.9	530-525	0.2		
OSF-225	私部南遺跡	PLD-4985	2450	±25	-26.1	750-685	26.4	665-635	9.6	620-610	1.5	595-410	57.9		
OSF-227	私部南遺跡	PLD-4986	2475	±25	-26.6	765-680	30.7	675-505	59.8	490-485	0.4	460-450	1.3	440-415	2.8
OSF-230	私部南遺跡	PLD-4987	2405	±25		725-690	6.7	540-400	88.6						
OSF-232-a	私部南遺跡	PLD-4988	2425	±25	-27.2	740-685	15.4	665-645	3.6	550-405	76.2				
OSF-232-b	私部南遺跡	PLD-4989	2405	±25	-26.9	725-690	6.7	540-400	88.6						
OSF-224-b	私部南遺跡	MTC-06737	2450	±30		750-685	24.8	665-630	10.4	625-610	2.5	595-410	57.6		
OSF-236	上の山遺跡	Beta-211230	2250	±40	-27.8	395-340	30.8	325-205	64.6						

註) $\delta^{13}\text{C}$ 値は安定同位体比質量分析計による測定値(ベータアナリティクス社・昭光通商)、較正年代は 2σ の範囲の確率密度で出現順(古い年代順)に表示

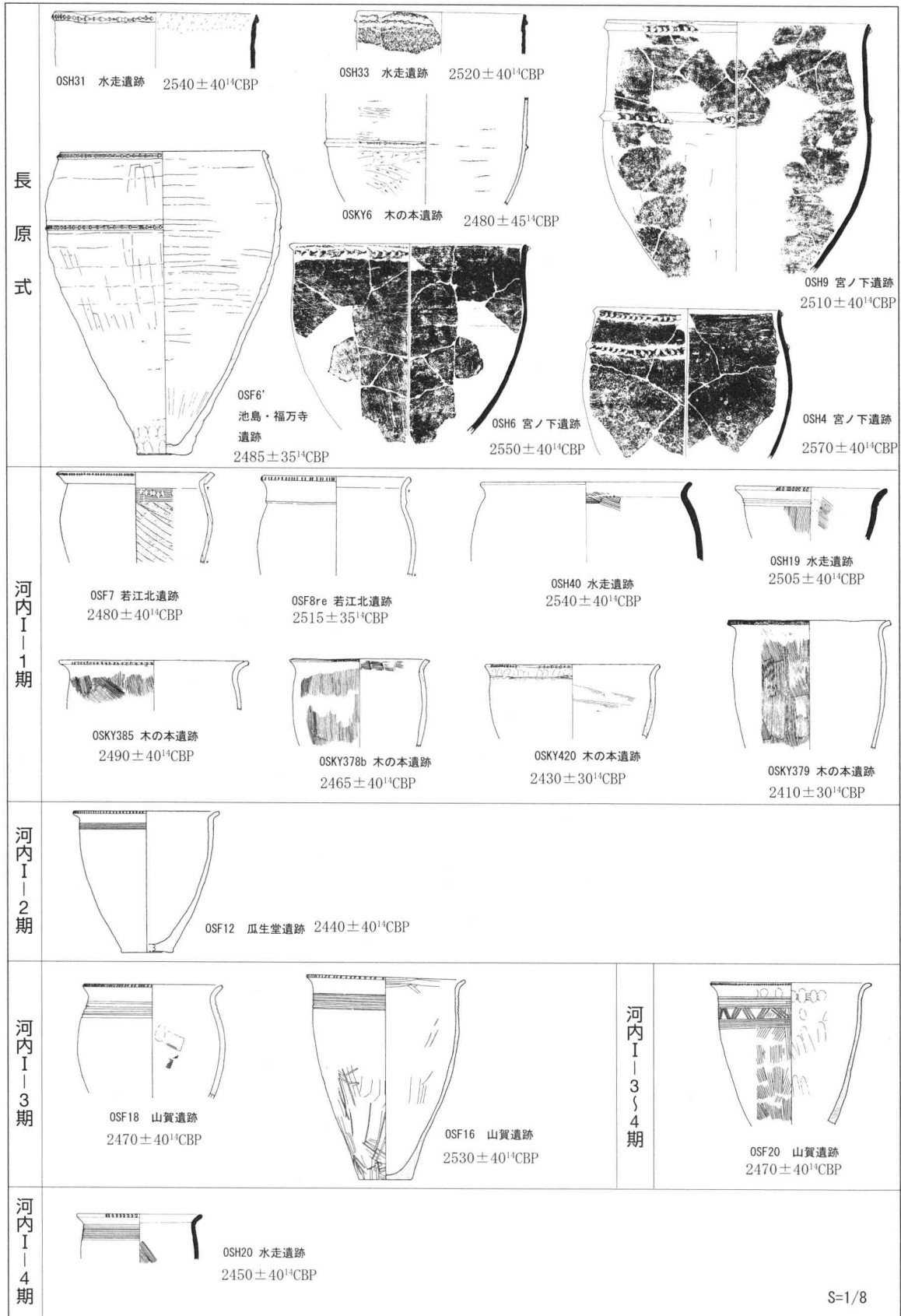


図 5 炭素 14 年代測定をおこなった縄文晩期～弥生中期土器 (1)

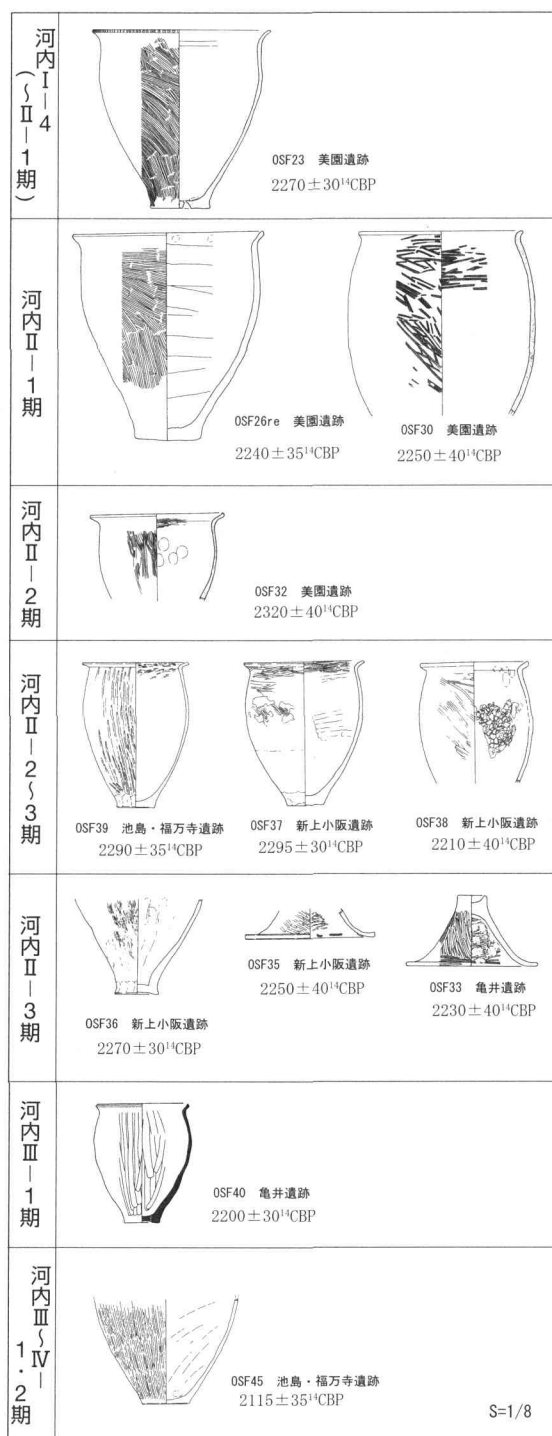


図6 炭素14年代測定をおこなった
縄文晩期～弥生中期土器(2)

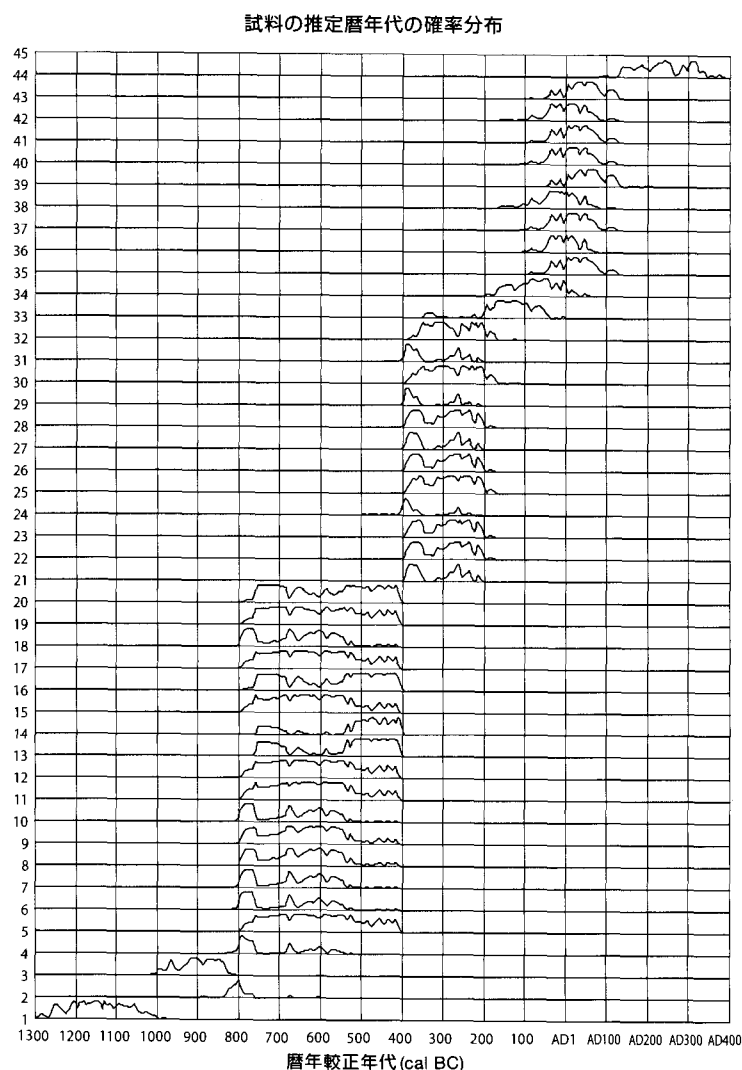
較正曲線上に縦軸の炭素年代値と曲線をあわせ、かつ横軸は土器型式順で任意の間隔で配置すると、図7のように配置することができる。これは土器型式を利用した準ウイグルマッチングとして、縄文時代の土器編年等を利用して実年代の推定を行うために仮定的に用いた方法である[小林2004ほか]。この結果からすぐさま実年代が判明するとはいえないが、少なくとも土器型式間の関係や時期ごとの順序が明確であれば、単に較正年代値や炭素年代値でみるのではなく、過去の大気濃度の変動と関連させることで、より妥当な較正年代値を絞り込むことができる。

近畿地方の場合、¹⁴C年代が2700¹⁴C BPより古い晩期前半の滋賀里Ⅱ・Ⅲ式は、少なくとも「2400年問題」よりは古いと考えられるので、滋賀里Ⅱ式は前1200～1050年頃のいずれか、滋賀里Ⅲ式はその直後である900-800cal BC年頃の急な傾斜にかかる頃である可能性が高いことがわかる。これらは、併行する瀬戸内東部の谷尻式・黒土BI式と同じ頃の年代値となり、整合的である。また、近畿地方では船橋式の資料を測定していないが、口酒井遺跡の口酒井式や、中国地方であるが岡山県南溝手遺跡・百間川遺跡群で編年的に対比される土器の測定結果から考えると、800cal BC年頃に船橋式の年代が相当する可能性が高い。長原式の大部分、弥生前期前半は主に「2400年問題」の前半、長原式相当の一部の縄文系土器や弥生前期後半の土器は「2400年問題」の後半に相当しよう。

弥生前期については、大阪府八尾市木の本遺跡のⅠ期古～中段階、若江北遺跡のⅠ期古段階のうちの1点および東大阪市瓜生堂遺跡のⅠ期中段階の土器はすべて前775～400年の年代に含まれるが、そのなかでも「2400年問題」の後半、即ち前550～400年の間に含まれる可能性がもっとも高い。若江北遺跡の1点および水

表 3 近畿地方(河内地域)の年代測定結果

^{14}C BP \pm				
1790	40	OSF165	布留 II	44
1960	40	OSF98	河内 VI -3	43
2000	40	OSF95	河内 VI -3	42
1980	40	OSF111RE	河内 V -3 ~ VI -1	41
1990	40	OSF110	河内 V -3 ~ VI -1	40
1950	40	OSF109	河内 V -3 ~ VI -1	39
2020	40	OSF105	河内 V -3	38
1990	40	OSF103	河内 V -3	37
2010	30	OSF102	河内 V -3	36
1980	40	OSF101	河内 V -3	35
2060	40	OSF90	河内 V -0	34
2115	35	OSF45	河内 III ~ IV -1・2	33
2200	30	OSF40	河内 III -1	32
2290	35	OSF39	河内 II -2・3	31
2210	40	OSF38	河内 II -2・3	30
2295	30	OSF37	河内 II -2・3	29
2250	40	OSF236	河内 II -3	28
2270	30	OSF36	河内 II -3	27
2250	40	OSF35	河内 II -3	26
2230	40	OSF33	河内 II -3	25
2320	40	OSF32	河内 II -2	24
2240	35	OSF26	河内 II -1	23
2250	40	OSF30	河内 II -1	22
2270	30	OSF23	河内 I-4 ~ II -初	21
2450	40	OSH20	河内 I 期末	20
2470	40	OSF20b	河内 I -3	19
2530	40	OSF18	河内 I-3	18
2480	40	OSF16	河内 I-3	17
2440	40	OSF12	河内 I -2	16
2485	35	OSF6'	長原	15
2410	30	OSKY379	河内 I 期古	14
2430	30	OSKY420	河内 I 期古	13
2480	40	OSF7	河内 I-1	12
2490	40	OSKY385	河内 I 期古	11
2540	40	OSH40	河内 I 期古	10
2510	40	OSH9	長原	9
2520	40	OSH33	長原	8
2540	40	OSH31	長原	7
2550	40	OSH6	長原	6
2480	45	OSKY6	長原	5
2570	40	OSH4	長原	4
2760	40	KYTU14	滋賀里 III b	3
2620	40	OSH5	滋賀里 III	2
2940	40	OSH15	晩期初頭	1



走遺跡の 1 点は「2400 年問題」の前半に含まれ、前 550 年よりも古い可能性を示している。

特に若江北遺跡の事例を見ると、同位置地点同一層から出土したような弥生 I 期古段階の土器で、「2400 年問題」の中央部分の段差を挟むような年代値を示すことから、若江北の最古の居住関係遺構面が「2400 年問題」の階段部分である前 550 年頃である可能性が高いと考える。

近畿地方の河内平野における弥生前期の始まりの時期は暫定的には、前 750 ~ 550 年の間にあると考えておきたい。今後、讃良郡条里遺跡の 03-4 調査区で近年発掘された土器群〔大阪府文化財センター調査、中尾ほか 2007〕など、若江北遺跡・水走遺跡より一段階古い可能性がある遠賀川系土器出土遺跡の年代測定を行うことで、近畿地方の弥生時代最古の状況がわかってくるであろう。

I 期新段階の水走遺跡例、山賀遺跡例や私部南遺跡の柱材・土器付着物は、すべて「2400 年問題」の後半に相当するのに対し、美園遺跡の中期初め、河内 II-1 期の土器付着物の較正年代は、前 395 ~ 200 年の年代のなかに含まれる。美園、池島・福万寺、新上小阪、亀井遺跡などの II-2 期以降の弥生中期の土器も同じような年代を示すが、そのなかでも新上小阪、亀井遺跡の河内 II-3 期や

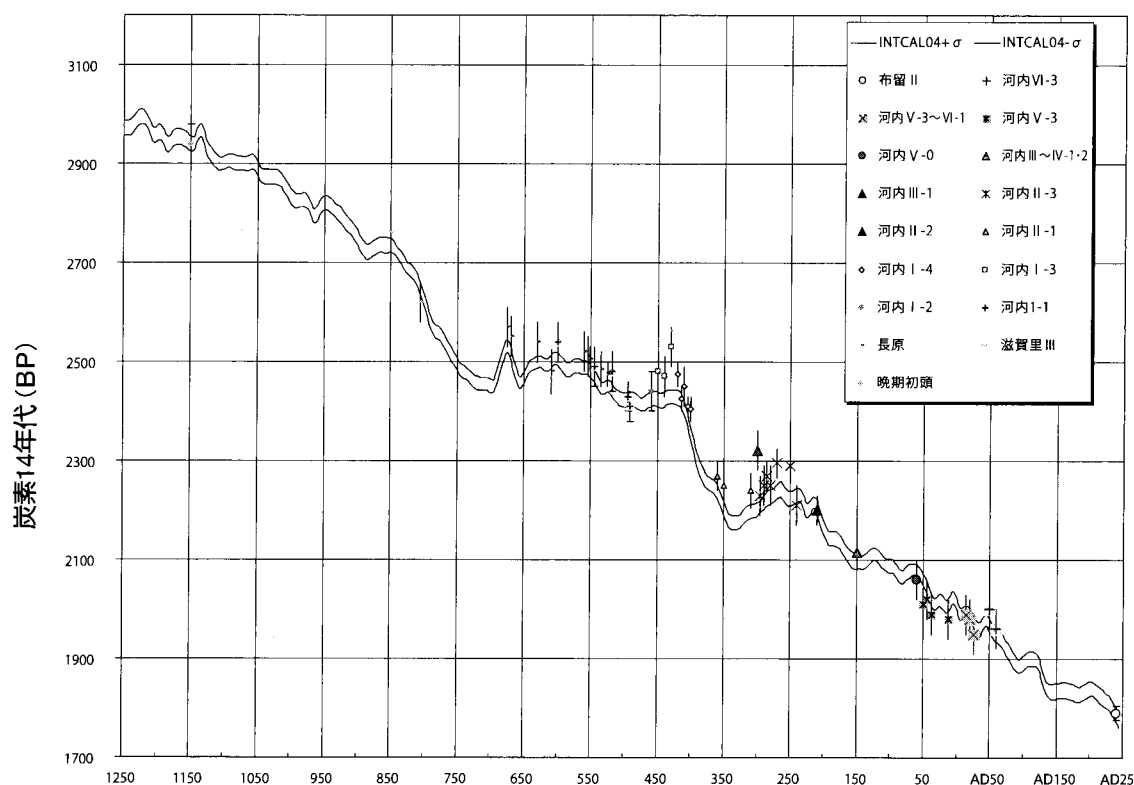


図7 較正年代(cal BC) IntCal04

亀井遺跡の河内Ⅲ-1期の土器付着物は、前380～195年、前360～195年、さらに確率は低いながらももっとも新しくみると前170年までと新しい年代が含まれる。前期の土器付着物は前390年よりも古い年代を示しているから、河内でのⅠ期とⅡ期の境は、前380～350年頃と推定される。弥生中期河内Ⅲ期・Ⅳ-1・2期は2200¹⁴C BP頃の較正曲線が波行する頃に相当する。

以上、少なくとも縄文晩期から弥生中期、さらには古墳時代前期布留式まで、土器編年の相対順序と¹⁴C年代測定値、それと較正曲線との関係は、整合的といえる。あえて推定を加えるならば、河内地域では下記の実年代を推定できよう。

縄文晩期前半滋賀里Ⅱ～Ⅲb式 BC1300～900年頃までの年代の範囲内。

縄文晩期船橋式 BC800年頃と推定。

縄文晩期長原式 BC800年より新しく多くはBC550年頃まで、可能性としてはBC500年頃まで存続。弥生土器との共伴時期で区分するならば、弥生土器と共伴しない長原式古相段階はBC800～BC650年頃以前、弥生土器と共伴する可能性がある長原式新相段階はBC650～500年頃、さらに唐古・鍵遺跡NRTK1例〔小林他2006a〕などその系譜を引く突帯文系土器は前5世紀まで残存すると想定できる。

弥生前期河内Ⅰ-1・Ⅰ-2期 BC700年よりは新しく、おそらくBC600年頃からBC550年まで。

弥生前期河内Ⅰ-3・4期 BC550年より新しくBC400年頃まで、またはBC350年頃まで。

弥生中期前半 河内Ⅱ・Ⅲ期（第二様式・三様式前半） BC350年以降BC200年頃まで。

弥生中期後半 河内Ⅳ期（第三様式後半・第四様式） 河内Ⅳ-1・2期はおおよそ前2世紀，河内Ⅳ期後半は年輪年代でのBC52年（池上曾根遺跡）を含む紀元前後まで。

2 河内以外の近畿地方

兵庫県伊丹市口酒井遺跡の突帯文土器，船橋式（口酒井式）の3点の較正年代は，835-755cal BC年，825-540cal BC年，795-535cal BC年である。前9～6世紀の間とおさえておきたい。

神戸市周辺では，突帯文・弥生前期土器を出土する大開遺跡・本山遺跡ともに「2400年問題」前半の測定値を得ている。Ⅰ期後葉とされる伊丹市岩屋遺跡の堰の木材では，ウイグルマッチングにより前410年代の年代が推定されている〔坂本ほか2006〕。

奈良盆地の唐古・鍵遺跡の大和第Ⅰ-1-a様式の土器も「2400年問題」後半の年代に含まれる。唐古・鍵遺跡の大和第Ⅰ様式は，すべて「2400年問題」の後半，即ち550cal BC年より新しく400cal BC年より古い。縄文系土器の末裔である奈良県唐古・鍵遺跡の突帯文系土器の年代は，780-470cal BC年の中の一時点である。この土器は突帯上に刻目をもたない新しい様相を示しており，大和第Ⅰ-1-a様式の土器と伴出している。下限は550cal BC年以降のは前5世紀とみておきたい。大和第Ⅱ様式の初め（Ⅱ-1-b様式）はそれを抜けて前380-350年に相当する可能性が高い。兵庫県の東武庫遺跡，玉津田中遺跡，香川県の鴨部川田遺跡の測定結果でも同様の傾向が認められる。なお，土器編年上では大和の第Ⅱ-1-a・b様式は，大阪・岡山のⅠ期新段階末に併行するとされている。大和第Ⅱ-1-b様式が河内Ⅱ-1期に対比される〔寺沢他1989〕。

3 中国・四国地方

香川県居石遺跡の黒土B1式（谷尻式）の較正年代は，1280-1130cal BC年頃に集中する。その後については，測定例が少ないが，愛媛県船ヶ谷遺跡の黒土B1式，岡山県総社市南溝手遺跡の南溝手B2類は，1150-1000cal BC年頃，前池式に近いとされる南溝手B3類や，高知県居徳遺跡の突帯文土器の古い段階とされる倉岡式は1000-900cal BC年頃に中心がある。

香川県林・坊城遺跡の沢田式古段階，それよりやや古いか併行する時期に位置づけられている香川県東中筋遺跡，岡山市岡大構内遺跡などの津島岡大式土器付着炭化物の測定は，10例以上を重ねている。2400年問題にかかっているのが年代を絞り込むことは難しいけれども，その前半，すなわち前8～6世紀の間に含まれる可能性が高い。

岡山の弥生前期の始まりは，前8～7世紀頃が上限の年代である可能性がよいと考えている。弥生前期末・中期初めの年代については，地域による編年上の齟齬があるため，一概に言えない。瀬戸内中部では，岡山市南方遺跡でⅠ期新とⅡ期初めとの境は，前380-350年頃と推定される〔小林ほか2004b〕。

以上，瀬戸内東部および讃岐・摂津（神戸市付近）・河内・大和（唐古・鍵遺跡）の地域を比べると，弥生文化の波及時期には西から東に向かって年代的に遅れる可能性があるのに対して，弥生前期と中期の境は，九州を除けば年代的にはほぼ一致する可能性が高い。九州については，藤尾慎一郎が精力的に検討を加えている〔藤尾2007〕。

表4 炭素14年代の較正年代年代に基づく近畿地方弥生時代の実年代(西本編 2005, 147頁を改変)

西 暦	瀬戸内東部		近畿(河内ほか)		近畿(大和・山城)		従来の年代	西 暦
2500	縄 文 時 代	中期 (里木Ⅲ)	縄 文 時 代	中期 北白川C式	縄 文 時 代	中期	縄 文 時 代	2500
		中津式						
2000		*福田 K2式						2000
		津雲 A式						
		*彦崎 K1式						
1500	後 期	(四元)	後 期		後 期	北白川上層3式	後 期	1500
		彦崎 K2式 元住吉山式 福田 K3式		*元住吉山式 滋賀里Ⅰ式		一乗寺式 元住吉山式 宮滝式 滋賀里Ⅰ式		
1000	晩 期	*黒土B1式(谷尻) *南溝手 B2 *前池式 *津島岡大式	晩 期	*滋賀里Ⅱ式 滋賀里Ⅲa式 *滋賀里Ⅲb式 *口酒井式 *長原式	晩 期	滋賀里Ⅱ式 滋賀里Ⅲa式 *滋賀里Ⅲb式 滋賀里Ⅳ式	晩 期	1000
		*沢田式				*長原式		
500	弥 生 時 代	*Ⅰ古 *Ⅰ中 *Ⅰ新	弥 生 時 代	*河内Ⅰ-1 *河内Ⅰ-2 *河内Ⅰ-3 *河内Ⅰ-4	弥 生 時 代	*大和Ⅰ-1a 大和Ⅰ-1b *大和Ⅰ-2a *大和Ⅰ-2b	弥 生 時 代	500
秦		*Ⅱ		*河内Ⅱ		大和Ⅱ-1a *大和Ⅱ-1b *大和Ⅱ		
紀元前		*Ⅲ		*河内Ⅲ		*大和Ⅲ		紀元前
紀元後 新		*Ⅳ		*河内Ⅳ		*大和Ⅳ		紀元後
250	後 期	*Ⅴ	後 期	*河内Ⅴ *河内Ⅵ	後 期	*大和Ⅴ *大和Ⅵ	後 期	250

*は年代を計測した土器型式

③……………近畿における弥生化の実像解明に向けて

年代測定の結果に基づいて近畿地方の弥生文化を考えると、以下の点について検討を加える必要がある。

1 長原式土器の存続期間の問題

縄文晩期長原式土器が、弥生時代前期土器と時間的に共伴するか否か、共伴する場合に同一遺跡・地点において共存するか地点を異にして時期的に同時存在するのか、共存する場合にどのように集団差を表すか、など様々な議論が重ねられてきた。ここでは、年代測定の上から見て、同一地域内に長原式土器と弥生前期土器とが同時期に存在しているかどうかを検討したい。

まず口酒井式土器についての測定結果を見ると、ぎりぎり「2400 年問題」の直前か「2400 年問題」前半にかかった年代に相当すると考えられ、較正年代で言えば 800-780cal BC 年頃と考えられる。この年代に相当する弥生前期土器は、近畿地方では現時点では測定例がなく、口酒井式・船橋式は突帯文土器単独で分布していたと考えられる。長原式になると、明らかに「2400 年問題」の前半に存在するもの（本山遺跡、水走遺跡の例）と、「2400 年問題」後半に含まれるもの（木の本遺跡、池島・福万寺遺跡、唐古・鍵遺跡）などが認められ、少なくとも長原式（水走式）の突帯文土器が相当長期にわたって存続していたことは間違いない。「2400 年問題」に含まれているために較正年代を絞り込むことは難しいが、地域的に見るならば、神戸市本山遺跡の水路に伴う突帯文土器は前 8～6 世紀で、すべて 2500¹⁴C BP 年代の ¹⁴C 年代であることから、その中央値付近すなわち BC700 年頃（前後 50 年程度は誤差を見込む）である可能性が高い。河内地域では、水走遺跡で明らかに突帯文土器と弥生前期土器が少なくとも極めて近接した時期に存在し、「2400 年問題」の前半と後半の境頃、即ち BC550 年を挟む年代頃に、水走式土器と弥生前期河内 I-1 期の土器が存在している。水走遺跡についてみると、屈曲をもつ 2 条の突帯文土器はやや古い年代値が測定され、胴上部が直立する 1 条突帯の土器はやや新しい ¹⁴C 年代値であり、この点からも長原式・水走式土器が BC550 年頃の前後、すなわち BC600-500 年頃にわたって存続していたことを示唆する。さらに池島・福万寺遺跡の長原式土器など、「2400 年問題」の後半に下る突帯文土器が確実に存在する。したがって、河内地域では BC600-500 年頃に弥生前期土器と突帯文土器が同時期に存在した可能性が高い。

最後に奈良盆地では、唐古・鍵遺跡最古段階の遺構において、突帯文土器最末期の土器と弥生前期大和第 I-1-a 様式土器が共伴しており、その年代は「2400 年問題」後半である。このことから、小地域ごとに共存期間は異なることが予想されるが、近畿地方全体で言えば、BC700 年頃から BC500 年頃の 200 年間は突帯文土器が存続していた可能性が大きい。神戸市周辺（摂津西部）や河内地域などと地域を分けると、突帯文土器と弥生前期土器が確実に共伴するのは 100 年程度になる可能性がある。ただし、現在測定値を得ている河内地域の弥生前期土器・突帯文土器共伴遺跡よりも讃良郡条里遺跡が 1 段階古く本山遺跡等に並ぶ段階であれば、河内地域でも、200 年近く突帯文土器と弥生前期土器が共存したことになる。

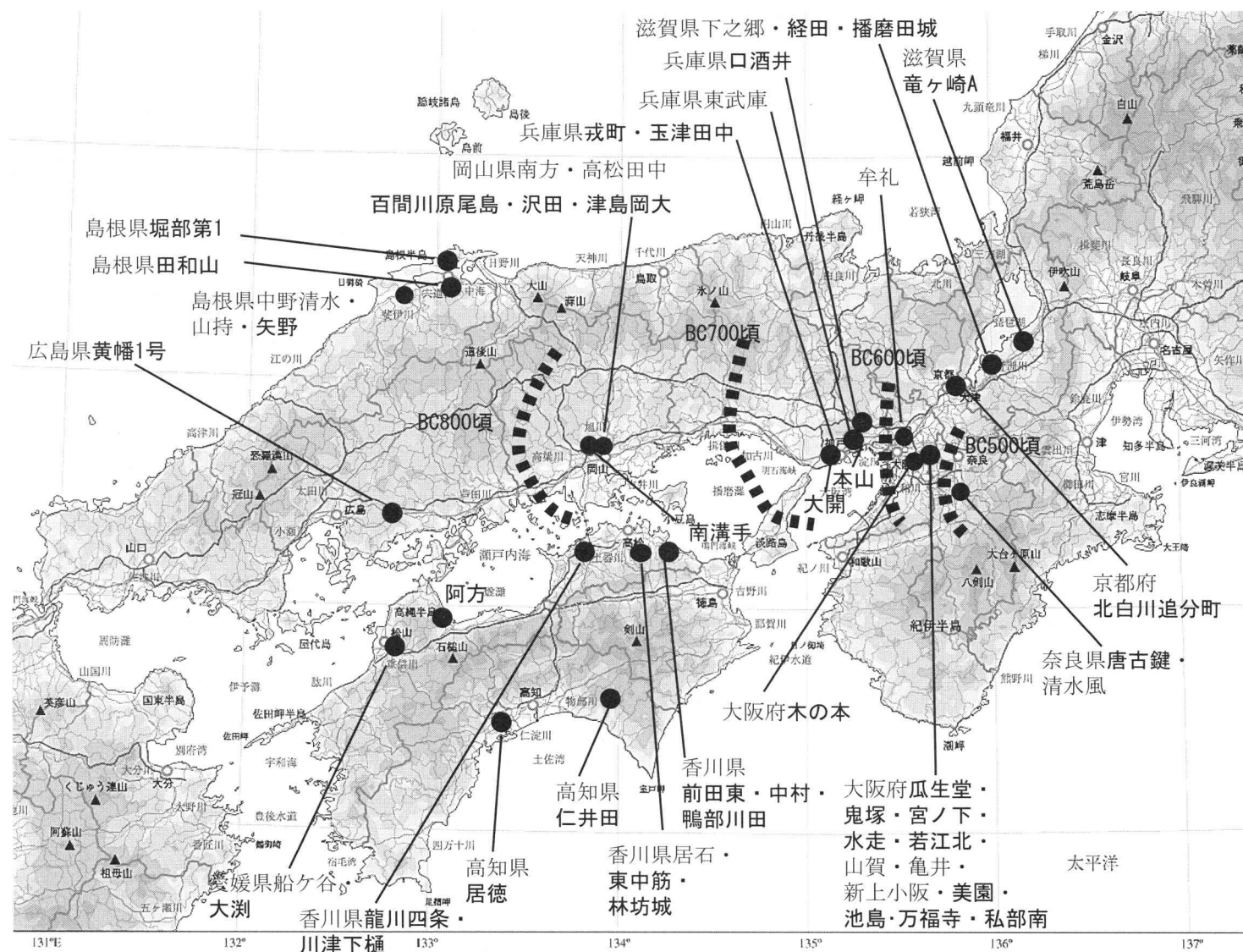


図8 弥生文化の伝播

遺跡は年代測定遺跡(縄文後期～弥生), うちゴシック文字は縄文晩期末～弥生前期の土器を出土する遺跡

2 時代区分の問題

河内、さらに近畿地方に限らないが、日本列島の中で、縄文時代と弥生時代を、いつどのように区分するかという問題がある。

藤尾慎一郎が説く〔藤尾 2005〕ように、北部九州の一遺跡で水田稲作が始まったときに、日本列島は弥生時代に突入するが、弥生文化はしばらく玄界灘にとどまる、という弥生時代像は、わかりやすくかつ論理的であるが、日本という政治的まとまり以前の地域社会を捉えるには一元的ではないかともいえる。

さらに設楽博己が論ずる〔設楽 2005〕ように、東日本弥生文化について独自性を認めた上で積極的に評価し、「縄文系弥生文化」と位置づける考えもあり、文化論としても議論が重ねられている。最終的には、地域ごとに水田稲作の出現時期や、東西の文物の交流とその時期を明らかにした上で、文化史的に再整理する必要がある。単に弥生時代の始まりがいつかという問題ではなく、実年代による弥生時代の再編成という点で年代測定研究の重要性が強調される。

3 近畿における弥生化の過程

ここでは、水田稲作が開始されるか、遠賀川系土器の出土に代表される文物のあり方によって、その技術がもたらされたと考えられる時点をもって、弥生文化が波及したと捉え、近畿地方にいつ頃、どの程度の年代幅で、弥生文化が波及したかを、上記の年代測定結果を基に仮定してみたい。これまでに多くの研究者により、弥生文化の波及過程についてモデルが提示されている〔若林 2002 など〕。森岡秀人は西から東へと伝播してくる状況をモデルとして示し〔森岡 1993〕、中西靖人は近畿の縄文と弥生の関係について「すみわけ論」を論じ〔中西 1992〕、秋山浩三は「共生論」を論じた〔秋山 1999〕。近畿地方における弥生系の文物・水田稲作の伝わり方について、あえて大きく分けると、2つの弥生化のモデルを提示することができる。バケツリレー式（図9のモデルA）と貫入式（図9のモデルB）である。Aはいわば手渡し式に、順々に弥生文化の要素が隣接する集落・地域に伝播していくモデルであり、Bは九州北部から、中部瀬戸内から、または四国北部から、直接的に移住または少数の集団、人間が渡来または情報が伝播し、近畿の特定の場所で水田稲作が始まるモデルである。両モデルの理論的検討や文物のあり方による実証的検討はひとまずおき、年代測定結果から並べるとどちらのモデルが有効かを検討してみることとしたい。

岡山では津島江道遺跡、津島岡大遺跡などから出土している津島岡大式土器の付着物の年代測定結果〔山本 2006〕が、800–780cal BC 年頃である。水田はそれより新しいので前 700 年頃に、岡山市付近の地域で水田稲作が始まっていると考えられる。

神戸市付近では、大開遺跡や本山遺跡の弥生前期甕や突帯文土器の付着物の測定結果は、「2400 年問題」の前半、すなわち前 8 世紀後半から前 6 世紀前半の中に含まれる年代である。上記で論じたように BC650 年頃に水田稲作が始まったと捉えておく。弥生前期前半期に遠賀川系土器と突帯文土器が共存することは大開遺跡や播磨地域〔今里 1971 ほか〕の例が知られており、播磨では弥生前期Ⅲ期初頭まで両者が併存していた、と早くから理解されてきた〔森岡ほか 2007 など〕。

瀬戸内を挟んだ香川県地域では、直接水田に関わる遺構から出土した資料を測定できていないが、

土器の併行関係から見る限り、東中筋遺跡ほかの突帯文土器で、岡山付近とほぼ整合する年代が得られており〔小林ほか2006b〕、少なくとも前8～6世紀の間に弥生文化が達していたと仮定できる。大阪の河内湖（潟）南・東部では、河内地域最古の弥生遺跡と考えられている若江北遺跡の集落が、BC600-550年頃に営まれていると考えられる。さらに若江北・水走遺跡よりも1段階古い可能性がある讃良郡条里遺跡〔中尾ほか2007〕の遠賀川系土器の存在を考慮すると、前600年を少し遡る頃には弥生文化が到達していた可能性も考えられる。

さらに東方の奈良盆地の唐古・鍵遺跡の突帯文土器と共伴する最古段階の弥生前期土器（大和第I-1-a様式）は、「2400年問題」の後半にあたり、もっとも古くみてもBC550年よりも新しい〔小林ほか2006a〕。目を転じて琵琶湖東岸についてみても、竜ヶ崎A遺跡などで出土している突帯文土器（長原式）は、「2400年問題」後半に確実に残っており、前6世紀後半～前5世紀のなかの一時点まで、突帯文土器がかなり新しい時期まで存続していた可能性が考えられる〔小林ほか2006c〕。

以上をまとめると、バケツリレー式（図のモデルA）に西から弥生文化が波及してくる中でも、地域ごとに50～100年近い時間差が生じており、容易には東へ広がっていないことが予想される。そうした状況を説明するモデルとして、小林青樹のいう「縄文の壁」が存在する文化伝播モデルが考えられる〔小林2006〕。

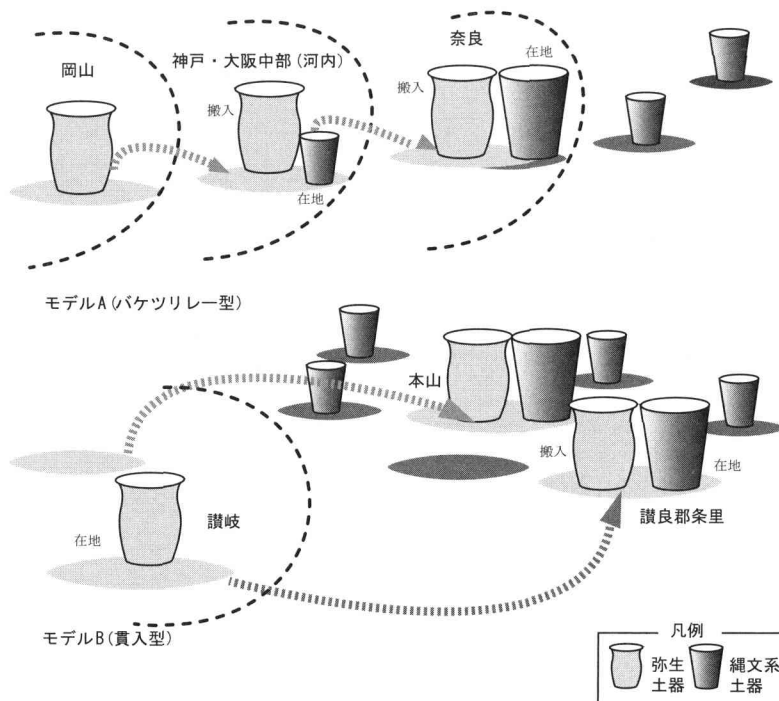


図9 弥生文化伝播の2つのモデル

以上のことは単に年代を測定しても解明できるものではなく、文化要素の上から検討していく必要がある。秋山浩三は、弥生開始期における讃岐金山産サヌカイトの河内地域への流入状況や、弥生前期最古の土器の製作にみられる讃岐との共通性などを根拠とし、さらに、河内地域における弥生前期の収穫用石器が讃岐産石材を用いているとされる指摘も視野に入れながら、河内における弥

生文化は讃岐地方から移入されたと考えている [秋山 1999, 2003]。

前述した年代的な共存関係の整理とあわせ、長原式土器は縄文系か（縄文的な生活様式をもった集団が用いる土器なのか）、石器組成などの検討を含めた生業の復元 [寺前 2001 ほか] や、石棒・土偶祭祀にみる縄文的要素のあり方 [小林 2000, 秋山 2002b・c] を重ねて検討していく必要がある。

④……………まとめと課題

縄文晩期については、後期末および晩期初めの年代の測定例が不十分であり、東日本の十腰内式～大洞諸型式の土器の年代に対比し得るような実年代を得るには至っていない。

岡山では津島江道遺跡で突帯文土器の時期の水田遺構が 1980 年代に見つかっており、近畿でも伊丹市口酒井遺跡や大阪市長原遺跡で突帯文土器の時期の土器に稲粃の圧痕がついた例が知られている。また、口酒井遺跡では突帯文に伴うか不明確だが磨製石庖丁も出土している。その時期の稲作の実態を明らかにして中国・近畿の水田稲作の始まりの実年代を示すこととともに、これらの地方でも北部九州と同じように弥生早期を設定することに関しての議論が再度必要であると考ええる。

本稿では弥生成立期を主とし前期と中期の境については詳述し得なかったが、鉄器普及の問題と関連し、検討すべき問題である。弥生中期の始まりについては、それぞれの地域で前期末と中期初めの土器型式の認定に変化が生じているため、土器編年上の対比も検討される必要がある。近畿の内部でも土器型式の変遷が一律ではないとすれば、中期の始まりの実年代は前 4 世紀の幅のなかで動くことになる。全体的に測定試料数はまだ不足しているが、当面は縄文晩期の測定事例を増すとともに、弥生前・中期については年輪年代がわかっている木材の炭素年代を積極的に測定し、日本の年輪年代と対応させた較正曲線を作ったうえで、より絞り込んでいきたいと考えている。

弥生中期中頃以降についても、試料の集中的な測定から、細かな年代比定は可能である。今後、岡山・大阪・奈良などの諸地域間の併行関係を年代測定の方からも検討していきたい。

謝辞

本稿での年代測定成果は、平成 16～18 年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築—」（研究代表 西本豊弘）の成果を用いている。較正年代については今村峯雄の方法に従う。国立歴史民俗博物館を中心とした年代測定研究グループ西本豊弘、今村峯雄、藤尾慎一郎、尾寄大真、宮田佳樹、遠部 慎（以上、国立歴史民俗博物館）、新免歳靖（総合研究大学院大学）、松崎浩之（東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻タンデム加速器研究棟）、設楽博己（駒澤大学）、小林青樹（國學院栃木短期大学）の各氏には、多くのご協力・ご教示を得た。大阪府文化財センターの資料については、三好孝一・市村慎太郎・川瀬貴子・山田浩史・岡本智子・丸吉繁一・廣瀬時習・後川恵太郎・後藤信義・島崎久恵・中尾智行・中川二美・河村恵理・松尾洋次郎（故人）・手島美香・大木 要・田中正子（（財）大阪府文化財センター）、中村朋子（大手前大学）、木の本遺跡については竹原伸次（大阪府教育委員会）、高槻市安満遺跡については森田克行（高槻市教育委員会）、牟礼遺跡については奥井哲秀・宮脇 薫（茨木市教育委員会）、東大阪市の資料については勝田邦夫・下村晴文（東大阪市埋蔵文化財センター）、神戸市の遺跡については丸山潔・

安田 滋・中村大介（神戸市教育委員会），兵庫県の遺跡については山本三郎・上田健太郎（兵庫県教育委員会），口酒井遺跡については浅岡俊夫（六甲山麓遺跡調査会）の諸氏に多大なご協力を頂いた〈所属はいずれも試料採取当時〉。特に，学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア」主催の大阪現地研究会（2005. 7. 18，於：大阪府立弥生文化博物館）での参加者のご教示によるところが大きい。本稿に用いた図表の作成においては，大野尚子，知識文恵両氏の協力を得た。記して謝意を表する。

追記

脱稿後，讃良郡条里遺跡出土土器の付着炭化物の年代測定を行う機会を得た。結果については，大阪府文化財センター発行の発掘調査報告書で報告したい。

註

- (1)——秋山浩三・朝田公年編 2000『池島・福万寺遺跡 1』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 48 集 財団法人大阪府文化財調査研究センター
井上智博編 2002『池島・福万寺遺跡 2』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 79 集 財団法人大阪府文化財センター
廣瀬時習編 2007『池島・福万寺遺跡 3』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 158 集 財団法人大阪府文化財センター
岡本茂史編 1998『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要XXI』財団法人大阪府文化財調査研究センター
岡戸哲紀編 1997『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要XXII』財団法人大阪府文化財調査研究センター
廣瀬時習編 2001『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要XXV』財団法人大阪府文化財調査研究センター
- (2)——三好孝一編 1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書-第 5 次-』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第 15 集 財団法人大阪府文化財調査研究センター
- (3)——川瀬貴子・秋山浩三編 2004『瓜生堂遺跡 1』財団法人大阪府文化財センター
- (4)——西口陽一ほか 1984『山賀(その 3)』財団法人大阪文化財センター
石神幸子・陣内暢子編 1991『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- (5)——渡邊昌宏編 1985『美園』財団法人大阪文化財センター
石神幸子・陣内暢子編 1991『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- (6)——市村慎太郎編 2003『新上小阪遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第 94 集 財団法人大阪府文化財センター
- (7)——寺川史郎・尾谷雅彦編 1980『亀井・城山』石神幸子・広瀬和雄編 1986『亀井(その 2)』財団法人大阪文化財センター
若林邦彦編 1993『河内平野遺跡群の動態Ⅵ』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- (8)——国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ 2007「大阪府私部南遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定」『私部南遺跡Ⅰ』（財）大阪府文化財センター調査報告書代 154 集
- (9)——国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ 2007「大阪府上の山遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定」『上の山遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書代 155 集
- (10)——大阪府教育委員会 2004『木の本遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2003-2
- (11)——東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会 1996『宮ノ下遺跡第 1 次発掘調査報告書』
- (12)——東大阪市文化財協会 1997『鬼塚遺跡第 8 次発掘調査報告書』
- (13)——東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会 1998『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告書』

参考文献

- 秋山浩三 1996 「B.C. 52 年の弥生土器」『大阪文化財研究』11 pp.23-50 財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 秋山浩三 1999 「近畿における弥生文化の具体相」『論争吉備』pp.189-222 考古学研究会
- 秋山浩三 2000 「「刻目段甕」型式変遷の効用」『突帯文と遠賀川』pp.1000-1003 土器持寄会
- 秋山浩三 2002a 「河内湖岸域における初期弥生水田をめぐって」『志紀遺跡（その 2, 3, 5, 6）』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 73 集, pp.651-663 財団法人大阪文化財調査研究センター
- 秋山浩三 2002b 「弥生開始期以降における石棒類の意味」『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集-』pp.197-224 古代吉備研究会
- 秋山浩三 2002c 「弥生開始期における土偶の意味-近畿縄文「終末期」土偶を中心素材として-」『大阪文化財論集Ⅱ』pp.49-68 (財)大阪府文化財センター
- 秋山浩三 2003 「弥生時代・畿内石庖丁の生産と流通-近畿における石庖丁生産・流通の再検討(Ⅳ)-」『道具の生産流通と地域関係の形成-縄文から古墳まで-』pp.37-64 古代学協会中国四国支部
- 秋山浩三 2004 「初期農耕集落としての瓜生堂遺跡」『瓜生堂遺跡 1』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 106 集 pp.465-482 財団法人大阪文化財調査研究センター
- 秋山浩三 2007 『弥生大形農耕集落の研究』青木書店
- 秋山浩三ほか 2004 『史跡池上曾根 99』和泉市教育委員会
- 今里幾次 1971 「縄文晩期から弥生前期への移行-兵庫県西部（播磨）を中心に-」『古代学研究』61 古代学研究会
- 今村峯雄 2004 「世界レベルの年代研究へ」『弥生時代の実年代-炭素 14 年代をめぐって-』pp.228-233 春成秀爾・今村峯雄編 学生社
- 今村峯雄編 2004 『課題番号 13308009 基盤研究(A・1)(一般)縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』（代表今村峯雄）
- 大塚達明 2000 「異系統土器論としてのキメラ土器論-滋賀里遺跡出土土器の再吟味-」『異貌』第 18 号 pp.2-19 共同体研究会
- 梶山彦太郎・市原実 1986 『大阪平野のおいたち』青木書店
- 国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ（小林謙一） 2007a 「大阪府私部南遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定」『私部南遺跡Ⅰ』pp.181-191 財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 154 集 財団法人大阪府文化財センター
- 国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ（小林謙一） 2007b 「大阪府上の山遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定」『上の山遺跡Ⅱ』pp.317-319 財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 155 集 財団法人大阪府文化財センター
- 国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ（小林謙一） 2007c 「大阪府池島・福万寺遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定」『池島・福万寺遺跡 3』pp.361-373 財団法人大阪府文化財センター
- 小林青樹 2000 『縄文・弥生移行期の石製呪術具』考古学資料集 12 国立歴史民俗博物館 春成研究室
- 小林青樹 2006 「縄文から弥生への転換」『弥生の始まりと東アジア』pp.26-29 第 53 回歴史博フォーラム 国立歴史民俗博物館
- 小林謙一 2004 『縄紋社会研究の新視点-炭素 14 年代測定の利用-』六一書房
- 小林謙一 2005 「土器付着物を用いた年代測定-試料採取と前処理-」『弥生時代の新年代』pp.48-57 新弥生時代のはじまり 第 1 巻 西本豊弘編 雄山閣
- 小林謙一 2006 「同位体分析による土器付着物の内容検討に向けて-考古学の立場から-」考古学リーダー 9 pp.112-133 六一書房
- 小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・坂本 稔・陳建立・松崎浩之・秋山浩三・川瀬貴子 2004a 「大阪府瓜生堂遺跡出土弥生～古墳時代土器の ^{14}C 年代測定」『瓜生堂遺跡 1』pp.715-726 (財)大阪府文化財センター 調査報告書第 106 集
- 小林謙一・春成秀爾・坂本 稔・今村峯雄・松崎浩之・扇崎由 2004b 「岡山市南方（済生会）遺跡出土土器付着物の ^{14}C 年代測定」『岡山市埋蔵文化財センター年報 3』pp.54-65 岡山市埋蔵文化財センター
- 小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・坂本 稔・尾畠大真・新免歳靖・松崎浩之・中村俊夫・藤田三郎 2006a 「唐古・鍵遺跡、清水風遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定」『田原本町文化財調査年報 2004 年度』14 pp.123-138 田原本町教育委員会

- 小林謙一・春成秀爾 2006b 「近畿地方における年代測定の成果」『弥生時代の新年代』pp.96-97 新弥生時代のはじまり 第1巻 西本豊弘編 雄山閣
- 小林謙一・遠部慎・春成秀爾・新免歳靖 2006c 「竜ヶ崎 A 遺跡出土土器付着物の ^{14}C 年代測定」『竜ヶ崎 A 遺跡』は場整備関係遺跡発掘調査報告書 33-1 pp.179-184 滋賀県教育委員会
- 坂本稔・春成秀爾・小林謙一 2006 「大阪府瓜生堂遺跡出土弥生中期木棺の年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集 pp.71-84 国立歴史民俗博物館
- 設楽博己 2005 「東日本農耕文化の形成と北方文化」『稲作伝来』4 pp.113-164 岩波書店
- 寺沢薫・森岡秀人・森井貞夫ほか 1989 『弥生文化の様式と編年（近畿編Ⅰ）』木耳社
- 寺前直人 2001 「弥生時代開始期における磨製石斧の変遷-中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域を中心として-」『古文化談叢』第46集 pp.27-52 九州古文化研究会
- 中尾智行・山根航 2007 「近畿最古の弥生土器-讃良郡条里遺跡の出土土器紹介-」『大阪文化財研究』第31号 pp.5-12 (財)大阪府文化財センター
- 中西靖人 1992 「農耕文化の定着」『新版日本の古代5 近畿』pp.93-118 角川書店
- 西本豊弘編 2005 『弥生農耕の起源と東アジア-炭素年代測定による高精度年代体系の構築-平成16年度文部科学省科学研究費補助金・学術創成研究・研究成果報告書』国立歴史民俗博物館
- 春成秀爾 2004a 「近畿・中国の実年代」『弥生時代の実年代-炭素14年代をめぐって-』pp.20-31 春成秀爾・今村峯雄編 学生社
- 春成秀爾 2004b 「弥生時代の年代推定」『季刊考古学』88 pp.17-22 雄山閣
- 春成秀爾 2007 「近畿における弥生時代の開始年代」『新弥生時代のはじまり』第2巻 pp.20-34 雄山閣
- 春成秀爾・今村峯雄・藤尾慎一郎・小林謙一・坂本 稔・西本豊弘 2005 「弥生時代中期の実年代- ^{14}C 年代の測定結果について-」『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』pp.130-133 日本考古学協会
- 広瀬和雄 1986 「弥生土器の編年と二、三の問題」『亀井(その2)』pp.247-306 (財)大阪府文化財センター
- 福永信雄編 2002 『瓜生堂遺跡第46・47-1・2次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会
- 藤尾慎一郎 2004a 「韓国・九州・四国の実年代」『弥生時代の実年代-炭素14年代をめぐって-』pp.6-19 春成秀爾・今村峯雄編 学生社
- 藤尾慎一郎 2004b 「新弥生年代の試み」『季刊考古学』88 pp.23-28 雄山閣
- 藤尾慎一郎 2005 「時代区分と弥生文化の範囲」『弥生農耕の起源と東アジア NEWS Letter』No.3 pp.4-7 西本豊弘
- 藤尾慎一郎 2007 「九州における弥生時代中期の開始年代」『新弥生時代のはじまり』第2巻 pp.45-51 雄山閣
- 光谷拓実 2004 「弥生時代の年輪年代」『季刊考古学』88 pp.40-44 雄山閣
- 森岡秀人 1993 「初期稲作志向モデル論序説」『関西大学考古学研究室四拾周年記念考古学論叢』pp.25-53
- 森岡秀人・荒木幸治 2007 「播磨地域における弥生土器編年研究の沿革素描」『弥生土器集成と編年-播磨編-』pp.405-431 大手前大学史学研究所編 六一書房
- 山本悦世 2006 「津島岡大遺跡の研究」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター』紀要2004 pp.7-15 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 若林邦彦 2002 「河内湖周辺における初期弥生集落の変遷モデル」『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集-』pp.225-239 古代吉備研究会
- Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP *Radiocarbon* 46 (3), 1029-1058.
- Sakamoto M. et al. 2002 An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B* pp.223-224: 298-301.

小林謙一（国立歴史民俗博物館研究部考古研究系）

春成秀爾（国立歴史民俗博物館研究部考古研究系）

坂本 稔（国立歴史民俗博物館研究部情報資料研究系）

秋山浩三（大阪府文化財センター, 国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2007年4月27日受理, 2007年9月14日審査終了）

¹⁴C Dating of Yayoi Period in Kawachi Districts

KOBAYASHI Ken'ichi, HARUNARI Hideji, SAKAMOTO Minoru and AKIYAMA Kozo

In December 2004, we completed the carbon-14 radiocarbon dating of approximately 150 samples from the Okayama and Shimane prefectures in the Chugoku region, the Kochi, Ehime and Kagawa prefectures in Shikoku, and the Hyogo, Osaka, Nara, Kyoto and Shiga prefectures in the Kinki region dating from Late Jomon to the Early Kofun period. Most of the samples were soot and burnt food adhering to pottery, though lacquer applied to pottery, carbonized rice and wooden posts from buildings were also included.

By calibrating our measurements we obtained dates for the Latest Jomon, Early Yayoi and Middle Yayoi periods for these regions as follows.

Latest Jomon: 13 century cal. BC-7 or 6 century cal. BC

Early Yayoi:

Chugoku and Shikoku: 7 or 6 century cal. BC-4 century cal. BC

Kinki: 6 century cal. BC-4 century cal. BC

Middle Yayoi: 4 century cal. BC-1 century cal. BC

In other words, it is possible that there is a gap of about 50 years between the start of Early Yayoi in the Okayama area and when it started in the Osaka and Nara area. It is estimated that the late Sawada type in Okayama and the Nagahara type in Kinki coincide with the first half of the Early Yayoi. This is also corroborated by the results of dating measurements. Because of differences in the certification of pottery types from inland Kinki as well in recent years, Middle Yayoi starts at varying dates within the 4th century BC.

It is possible that Nagahara-type pottery and Mizuhai-type pottery, thought to be Late Jomon pottery, continued in existence from the 8th century BC to the 5th century BC. There is a strong possibility that in the Kawachi district Nagahara-type and Mizuhai-type pottery were associated with Early Yayoi pottery at least up until the middle of Early Yayoi.

In addition to increasing the number of samples measured, we intend to narrow down the dates of the Early Yayoi and Middle Yayoi periods further by constructing a calibration curve based on Japanese dendrochronology obtained by the carbon-14 dating of wood that has been tree-ring dated.